秋田県文化財調査報告書第61集

塚の下遺跡発掘調査報告書

秋層県埋蔵文化財センタ

1979 . 3

秋田県教育委員会

昭和50年の文化財保護法の改正によって埋蔵文化財の保護が強化 され、周知の遺跡が土木工事等の工事着工前に発掘調査される例が、 多くなりました。これは埋蔵文化財を保護する立場からすると記録 保存であり、諸般の事情から、現状ではやむをえない事と存じます。

本報告書は、そうした事情と、法の定めにより、県道大館十和田 湖線バイパス工事計画路線上にあった大館市所在、塚の下遺跡の発 掘調査を、県土木部と協議の上、昭和52年、53年と2ヶ年にわたっ て実施したものの報告書であります。

調査も長期にわたり、昭和53年の調査では大量の土器・石器が集石と一緒に発見されました。しかし年度内に報告書を仕上げなければならないという時間的制限があって、本報告書には出土品の代表的なものだけしか紹介できなかったのでありますが、そうした条件の中で、遺跡の特徴をつかんでいただけるよう配慮したつもりであります。

最後になりましたが、本遺跡の発掘調査から整理・報告書作成までたずさわって下さった大館市立城南小学校田村栄先生、調査員の派遣ならびに整理室を提供していただいた大館市、同企画室市史編纂室、同教育委員会、加えて何かと調査に便宜を計っていただいた県土木部道路課、北秋田土木事務所、KK花岡土建に対して心から感謝の意を表すものであります。

昭和54年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠 山 芳郎

凡 例

- 1. 本報告書は県道大館十和田湖線バイパス工事に係る塚の下遺跡 の発掘調査報告書である。したがって遺跡の道路計画幅だけの発 掘調査である。
- 2. 本調査は工事を計画した秋田県土木部の依頼によって、昭和52 年、53年の2ヶ年にわたって実施したものである。
- 3. 本報告書作成のため整理には第1次調査には東北大学大学院学生藤原姫敏、早稲田大学々生小林克、秋田大学々生尾張屋信子、文化課富樫泰時、池田憲和、鉄器の処理には東北歴史資料館の指導を得た。第2次調査には大館市立城南小学校教諭田村栄、大館市史編さん室板橋範芳、男鹿市小玉準、文化課富樫泰時、同臨時職員藤井安正があたった。
- 4. 本報告書の執筆者は下記のとおりである。
 - I-2, II-1・3, III-3の石器以降Ⅳは富樫泰時
 - I-1, Ⅲ-1·2·4は田村栄
 - Ⅱ-2は県立大館工業高等学校教諭藤木幸雄

1.遺	跡の立地と環境			1
1. j	遺跡の位置と環境			1
2. [調査に至る経過			3
Ⅱ.第	1 次発掘調査			5
1.	発掘調査の方法と概観			5
2. 1	地 質	•••••		6
3. j	貴構と遺物			10
Ⅲ. 第	2 次発掘調査			52
1. t	地 質			52
2. i	貴 構			52
	出土遺物			
	† U:			
Ē	図 目 次			
第1図	遺跡位置図2	第16図	焼土遺構3実測図	2
第2図	発掘調査全体図 4	第17図	竪穴遺構,竪穴住居1号跡実測図…	23
第3図	グリッド模式図 5	第18図	2 号竪穴住居跡実測図	24
第4図	地層図6	第19図	2 号竪穴住居跡出土遺物	25
第5図	溝1・2実測図11	第20図	2 号竪穴住居跡出土遺物	26
第6図	溝 3 実測図12	第21図	3号竪穴住居跡出土砥石	27
第7図	溝 4 実測図13	第22図	3号竪穴住居跡実測図	28
第8図	溝 5 実測図14	第23図	4 号竪穴住居跡実測図	25
第9図	土	第24図	4 号竪穴住居跡出土遺物	31
第10図	土址 5~6 実測図17	第25図	4 号竪穴住居跡出土遺物	32
第11図	土址 7 実測図18	第26図	5 号竪穴住居跡実測図	33
第12図	土址 8 実測図18	第27図	5号竪穴住居跡出土遺物	33
第13図	土址 9 · 10実測図18	第28図	5 号竪穴住居跡出土石製品	33
第14図	焼土遺構 1 実測図19	第29図	6 号竪穴住居跡実測図	35
第15図	燒土遺構 2 実測図20	第30図	6 号竪穴住居跡遺物出土地点図	36

第31図	6 号竪穴住居跡出土遺物37	第57図	土器拓影67		
第32図	6 号住居跡出土遺物38	第58図	土器拓影68		
第33図	鉄器実測図(鉄鏃他)39	第59図	土器拓影69		
第34図	鉄器実測図(小刀他)40	第60図	土器拓影70		
第35図	鉄器実測図41	第61図	土器拓影71		
第36図	石器実測図(砥石)41	第62図	土器実測図72		
第37図	8 号住居跡出土遺物43	第63図	土器実測図73		
第38図	縄文土器実測図44	第64図	土器実測図74		
第39図	縄文土器拓影45	第65図	土器実測図75		
第40図	縄文土器拓影46	第66図	土器実測図76		
第41図	石器実測図48	第67図	土器実測図77		
第42図	石器実測図49	第68図	土器実測図78		
第43図	石器実測図50	第69図	土器実測図79		
第44図	須恵器拓影50	第70図	土器実測図80		
第45図	鉄器実測図50	第71図	土偶実測図83		
第46図	第2次発掘調査区域全体図51	第72図	鐸形土製品実測図84		
第47図	土層断面図53	第73図	蓋その他実測図85		
第48図	土址実測図55	第74図	搔器模式図86		
第49図	土器拓影59	第75図	石器実測図(搔器・石匙・石鏃など)…87		
第50図	土器拓影60	第76図	石皿実測図 ·····89		
第51図	土器拓影61	第77図	三脚石器実測図90		
第52図	土器拓影62	第78図	三角形,円盤状石製品91		
第53図	土器拓影63	第79図	円盤状石製品, 他92		
第54図	土器拓影64	第80図	石垂実測図93		
第55図	土器拓影65	第81図	ベニガラの塗抹された礫実測図93		
第56図	土器拓影66				
Б	図 版 目 次				
第1次調查図版図版1~4		第 2 次調査図版			

I. 遺跡の立地と経過

1. 遺跡の位置と環境

県道、大館―小坂線は、大館市御成町―丁目(大館駅付近)を起点とし、小坂鉄道、小坂線と並んで大館盆地を横断している。その県道を東方へ約4.5 km, 大館駅から車で、およそ10分の地点に本遺跡群の所在する大茂内集落が位置する。当地域は、比較的交通の便もよく、交通機関としてはバスの外に私鉄があり、東岱野駅が最寄りの駅である。

大茂内集落は通称長木地区の一集落で、大館盆地の北東縁山麓に位置している。本遺跡群は、そ の大茂内集落の南端を走る私鉄、小坂線沿線の台地に分布している。

当地域には、長木川、大茂内、小茂内川等の中小河川が流れ、長木川は、大茂内集落の東方約1.5 kmの地点で山地から盆地内に入り、遺跡の南方約500 mの地点を西流している。また、大茂内川は、大茂内集落の北方約1.5 kmの地点で山地から盆地内に入り、遺跡の西方約500 mの地点を南流して隣の上代野集落を境している。長木地区は、この両川によって形成された扇状地上にあり、大茂内集落はその扇頂部に位置する。ちなみに、この付近では地形面はおおむね南西方向に傾斜している。この地域の地形は、上記の河川によって決定されたが、各河川が互いに複雑に入り組んでいたことを物語るが如く、地形も、複雑な数多くの段丘状の様相を呈している。もっとも、段丘状の地形の中には、地ならしのためであろう人工的なものも含まれる。

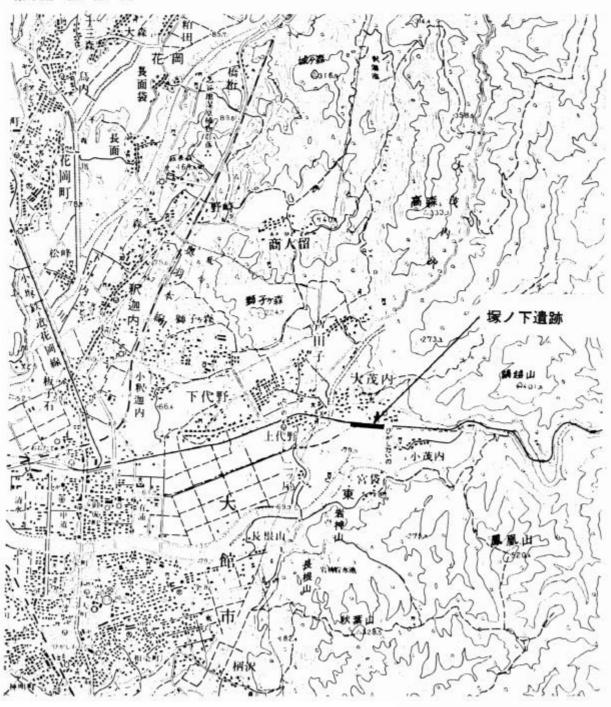
これら段丘のうち最も高い位置にあるものは、大茂内集落の北端の地山に接する部分で標高約100 ~ 120 mである。段丘上は大部分が杉林になっており、一部畑地及び宅地となっている。遺跡としては、台地の北端に諏訪台A、Bの両遺跡が確認されている。

上記の段丘に続くのは、本遺跡群および大茂内集落ののる台地で標高約80~90mである。この台地は、以下に続く低い段丘および低地とともに、いわゆる沖積段丘群に属するものであり、下位の段丘あるいは低地との比高は、本遺跡群の所在する地点では比較的高く、約3m以上あるが、場所によっては比高0になるところもある。台地上は、10年ほど前までは宅地以外はほとんど畑地であったが、現在は大部分が水田と化している。

本遺跡群は、この台地の南端に分布するが、その密度は台地上を走る線路を境にして南側、とく に下位の低地に接する台地の先端部が濃いものと思われる。しかし、遺跡群の一部は線路敷設当時 に破壊、消滅したものと思われるし、また、線路の北側は、現在、大部分が水田と化しており、南 側の台地先端の一部も墓地となっているため、実際の遺跡群の分布状態は明らかでない。

本遺跡群の存在は、その一部はかなり以前から知られていた。関連遺跡としては、塚の下A、B 遺跡が遺跡台帳に登録されている。塚の下A遺跡は、本遺跡群の南側の台地先端部に位置し、現在 は畑地となっている。塚の下B遺跡は、やはり同台地の先端部に位置し、A遺跡の北西方約200 m の地点である。ここも、かっては畑地であったが、現在は水田と化している。両遺跡は、いずれも、かなり以前からその存在が知られており、地元の集収家によって遺物(石器類)が採集されている。本遺跡からは、南東方に鳳凰山(520.4m)、東方に鍋越山(401.8m)、北西方に通称、太平山(薬師森とも言う)(273.3m)の山々を目前にすることができる。

第1図 位置図



2. 調査に至る経過

昭和51年11月5日,大館市教育委員会から、県が計画している大館十和田湖線バイパス工事路線上に遺跡のある旨連絡があった。つづいて11月9日,県文化財保護指導員の田村栄先生からも同じような連絡があり、間違いなく塚ノ下遺跡の中を通るとのことであった。そこで文化課では、直接工事を担当している北秋田土木事務所及び県土木部道路課と連絡をとった。昭和51年11月26日付け、北土一3809で北秋田土木事務から現地調査の依頼があり、12月6日,文化課富樫が現地を調査した。その結果を課内で検討し、発掘調査の必要のあることを道路課に連絡した。

道路課ではそれを受けて、文化財保護法第57条3の規定により、昭和52年3月28日付け、北土第715号で秋田県知事から文化庁長官へ「埋蔵文化財包蔵地に係る事業計画について」という通知が提出された。これに対して、昭和52年6月16日付け、委保第5の938号で文化庁長官安嶋禰から「埋蔵文化財の発掘について(通知)」があり、その中で工事着工前に発掘調査を実施するようにとの指示があった。

そこでこの旨を道路課に通知し、発掘調査等の打合せを重ね、下記の日程と体制で発掘調査を実施することになった。

1. 発掘調査の目的

県道大館十和田湖線バイパス工事に係る塚ノ下遺跡の事前発掘調査を実施し、記録保存をはかる こと。

2. 発掘調査主体者

秋田県教育委員会,教育長 畠 山 芳 郎

3. 発掘調査担当者

富樫泰時 秋田県教育庁文化課学芸主事

池田憲和 " 社会教育主事補

板橋範芳 大館市役所企画室, 市史編さん室主事

田村 栄 大館市立城南小学校教諭

4. 調査補助員

藤原妃敏 東北大学大学院

小林 克 早稲田大学学生

5. 協力者

県立大館鳳鳴高等学校社会科クラブ員(顧問・渡部紘一) 大館市教育委員会社会教育課主事・秋山慶紀

6. 調 査 面 積

(1) 調査対象面積 6,174m²

(2) 発掘面積 3,000m²

7. 発掘着手の時期及び終了の時期

昭和52年7月20日 昭和52年10月5日

以上の予定で調査計画を立てたが、調査員の都合や、水田耕作等の都合で調査期間は11月20日ま でのびた。

この調査の結果、さらに西側に延びていることが確実となり、この実態を道路課に理解していた だき、昭和53年に西側の残った部分を発掘調査することになったのである。そこで昭和52年の発掘 調査を第1次調査とし、昭和53年の発掘調査を第2次調査としたのである。第2次調査の体制は次 のとおりである。なお調査の目的、主体者は第1次と同じなので省略す。

1. 発掘調査担当者

田村 栄 大館市立城南小学校教諭

板橋範芳 大館市役所企画室市史編さん室主事

富樫泰時 秋田県教育庁文化課学芸主事

2. 調査補佐員

藤井安正 秋田県教育庁文化課臨時職員

3. 協力者

大館市教育委員会社会教育課

大館市史編さん室

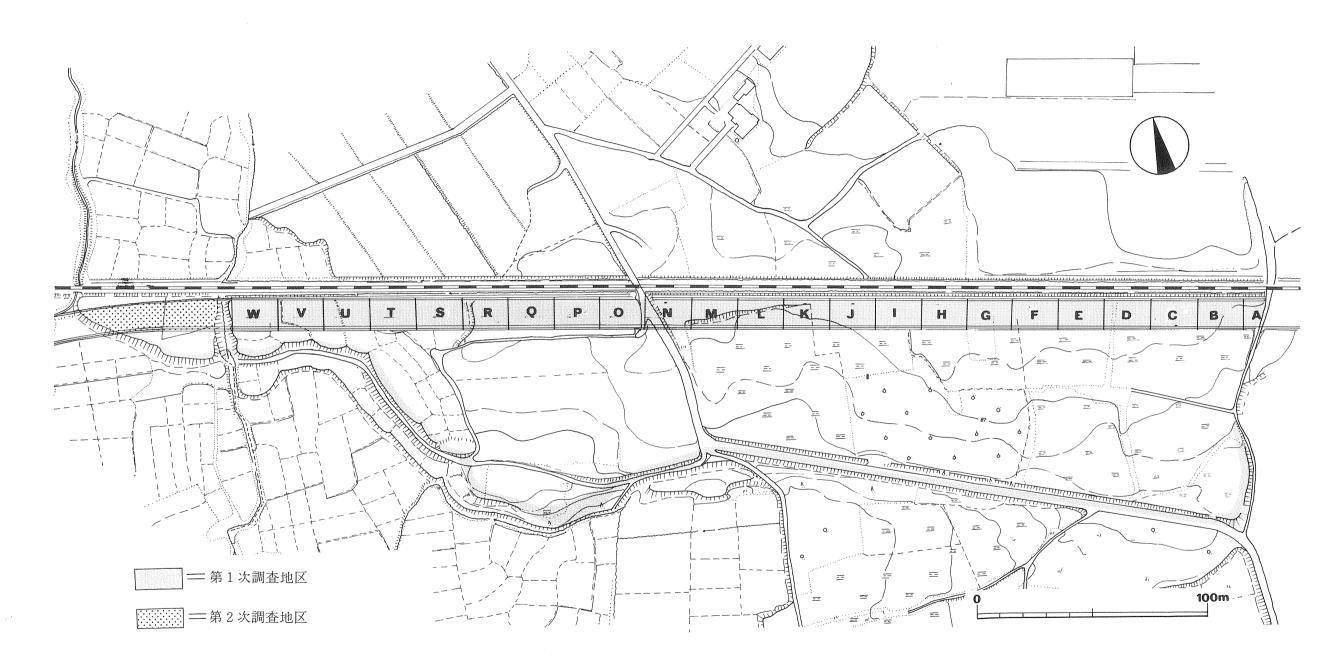
4. 調 査 面 積

発掘調查面積 1,500m⁴

5. 発掘調査着手の時期及び終了の時期

昭和53年5月10日 昭和54年3月20日

以上の予定で発掘調査を実施した。調査の結果、予想以上に遺物が多量に出土し、遺物整理に大 変な時間を要した。しかし遺物整理は調査員が別の仕事(本務)をもっていたため充分満足の行く 作業はできなかったのが実情である。



Ⅱ. 第 1 次 発 掘 調 査

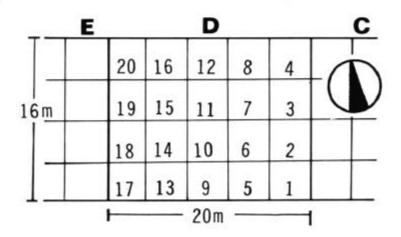
1. 発掘調査の方法と概観

秋田県土木部で計画したバイパス道路の幅は16mであり、その幅で土地買収も終了していた。発掘調査予定の総延長が約500 mであったので、大きく東から20mごとにA、B、C……と大区分し(第2図)、さらに道路幅にあわせて4m×4mグリッドとし発掘調査を進めることとした。すなわち1地区には1~20のグリッドが入ることになる。したがってグリッドの呼び方はD1~D20となる(第3図)。

発掘調査は工事の関係から、東側から西側へと進めた。A、B地区はすでに土取り作業がおこなわれており、加えて作業小屋が建っていて調査は不可能であった。そうした事情から発掘はC地区からはじめた。C、D、E、F区で溝状遺構、土城が数基、それに集石と思われる遺構が検出されたが、土取りのため石がかなり動いていると思われた。G、H、I、J区は礫が地表面からあって畑作物もよくできないといった場所であった。各区とも一部発掘を試みたが遺構、遺物は全く発見されなかったので他の地区も発掘することをやめた。K、L、M区では土城、竪穴住居跡、焼土遺構などが発見され、この地域に一つの集落のある可能性がある。Q、R区では竪穴住居跡3軒(いずれも古代末期)、竪穴遺構、焼土遺構などとともに、遺物(土師器・石器など)が発見された。この地区は南に舌状に台地が延びているので、この南側の台地にも集落があるであろう。

ここから西側は水田で、10月下旬から11月中旬にかけての調査となった。S, T区は水田造成で 削平されて遺構は確認できず。T区の西側からW区にかけては竪穴住居跡が6軒確認された。これ らの住居跡のほとんどは道路幅の関係で完据できなかった。

第3図



2. 地 質 ――大茂内降下火山灰層の重鉱物組成――

1. はじめに

花輪盆地で大湯ストンサークルをおおう降下火山灰層は、大湯軽石質火山礫層と呼ばれていて、 大館盆地においても白沢~達子森の東側に分布し、重鉱物組成上角閃石を含まないとされている(内 藤、1966)。

このたび、大館市大茂内の小坂鉄道東岱野駅近くの塚ノ下遺跡発掘地点において、うすい粗粒火 山灰層ないし火山礫層が発見されたので筆者は重鉱物分析を担当した。その結果、内藤(1966)の ** 大湯軽石質火山礫層に対比できる結果を得たので報告する次第である。なお、対比の都合上、十和 田火山に起源をもつとみられるその他の火山灰層の組成についても若干言及する。

2. 產 状

試料は I 、II 二つのグリッドから合計 4 個を採取した。それぞれ \mathbb{O} ~④とし、柱状図と採取位置を第 4 図に示す。

Iでの産状

下位から茶黒色粘土層, 黒色土層の2層に区別できる。

茶黒色粘土層は乾燥するとたてにクラックが入り、灰褐色になる。礫をほとんど含まず、土壌断面のB層に相当する。

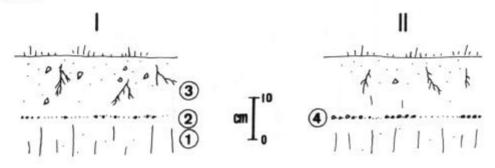
一方, 黒色土層は有機質で毛根を多く含み, 異質岩(石英安山岩質)の角礫もまばらに含む。下 位層との境界ははっきりせず、3 cm位のあいだで漸移する。土壌断面のA層に相当する。

火山灰層は黒色土層中にあり、厚さ5mm以下で水平に断続的に見られ、注意しないとわかりにくい。黄褐色~褐色、4~1mmの比較的粒径のそろった軽石質の砂礫である。

Ⅱでの産状

Iの東側約15mのグリッドで、茶黒色粘土層、黒色土層ともIと同様である。火山灰層は4~1 mmの黄褐色軽石質砂礫でIと同様であるがやや厚く、8 mm大の軽石も含む。

第 4 図



**大茂内降下火山灰層と仮称する。

3. 分析法

自然状態の風乾試料を約50gとり、汚濁しなくなるまで水洗する。次に濃塩酸に約20分位ひたしてから充分水洗し、乾燥させて0.1~0.25mm粒径にふるいわけする。これからプロムホルム(比重2.89)を使って重鉱物を分離し、薄片を作成する。重鉱物組成は、偏光顕微鏡下で合計150個以上になるまで各鉱物数を数えて求めた。

4. 重鉱物組成

第1表の結果を得た。すなわち、Iにおいて茶黒色粘土層と黒色土層はいずれも角閃石を含み組成上似ているが、火山灰層は角閃石を含まず明らかに異なった組成を示す。また、IIにおける火山灰層も角閃石をほとんど含まず、組成的にもIの火山灰層と同じである。なお、1%の角閃石の含有はサンプリング時の混入とみられる。

第1表 重 鉱 物 組 成

名	称	No	鉄 鉱 物	角 閃 石	斜方輝石	単斜輝石
	*	3	45	5	41	9
		2	49		44	7
大 茂 内		0	43	8	38	11
	*	(4)	50	1	38	11
		672202D	56		37	7
大湯軽石質火山礫層		672205C	46		41	13
		H 1	53		37	10
毛馬内軽石質火山灰	1)火增	H 2	58		35	7
	. DC 109	672202C	49	6	28	17
申ケ野軽石質火山	質火山火槽	672205B	56	6	22	16
	石質火山灰層	Н 3	50	11	26	13
		H 5	68	8	15	9
		H 11	60	7	22	11
th th ex 50 t		O 1	46	14	23	17
鳥越鞋有質火山		H 4	51	16	21	12
		H 7	50	12	25	13
		H 10	58	10	22	10
		H 12	57	16	18	9
		H 6	51	2	28	19
高市軽石質火山	軽石質火山灰層	H 8	55	1	27	17
		Н 9	59		29	12

^{*}降下火山灰層 鉄鉱物は磁鉄鉱とチタン鉄鉱を一括するが、ほとんど磁鉄鉱である。 各火山砕屑物層の名称は内藤(1966)の区分による。

5. 対 比

花輪、大館の各盆地に分布する十和田火山起源の火山砕屑物層は、軽石質火山灰流堆積物が4層、降下火山砕屑物が2層それぞれ知られており、これらは段丘面との関係、重鉱物組成などから内藤 (1966)によりはじめて区分されたものである。一方、中川、ほか(1972)は十和田火山の発達史を総括する中でこれらの火山砕屑物層と八戸地方に分布するそれとの対比を行った。その後、大池(1974)は中川、ほか (1972)の一部を修正し、中瀬浮石に対比された大湯軽石質火山礫層を八甲田 a に対比し、さらに八甲田 a を十和田 a と呼びかえた。そして、十和田火山の最も新しい噴出物である毛馬内軽石質火山灰層は、大湯軽石質火山礫層の降下後に流下した火山灰流堆積物であり、両者は同一時期の噴火活動に由来する (約1,000年前、平安時代中~末期)とのべて、十和田火山が活火山であることを強調している。

さて、今回の大茂内降下火山灰層がいずれに対比されるか、あるいは従来知られていないまった く別の火山灰なのか検討するために筆者の所属校のクラブ活動等で蓄積した各火山砕屑物層につい てのデーターを第1表にあわせて示した。このうち火山灰流堆積物は軽石のみ粉砕して分析したも のである。

これから各火山砕屑物層の特徴がかなり明瞭に読みとることができる。すなわち、高市軽石質火山灰層は角閃石を含まず、斜方輝石が27~29%、単斜輝石が12~19%であるのに対し、鳥越軽石質火山灰層は角閃石を含み(7~16%)、斜方輝石が15~26%、単斜輝石が9~17%と輝石が少くなる。一方、申ケ野軽石質火山灰層は角閃石を含み斜方輝石22~28%、単斜輝石16~17%であるが、毛馬内軽石質火山灰層、大湯軽石質火山礫層はともに角閃石を含まず、斜方輝石が35~41%と多く、単斜輝石が7~13%と低い特徴を示す。また、毛馬内、大湯とも組成的によく似ており、同一時期の噴火活動にともなったとする大池(1974)、平山・市川(1966)の推定を裏づけている。

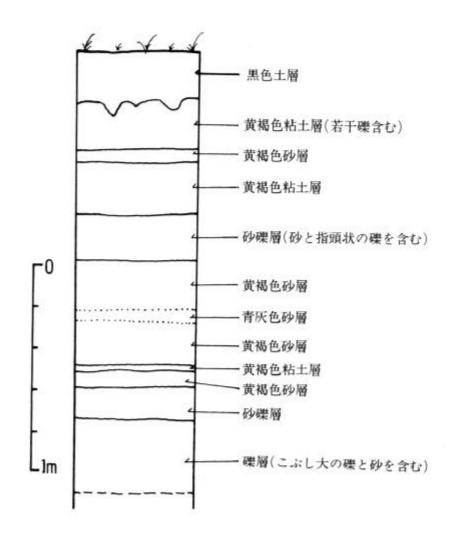
以上の特徴と今回分析した②、④を比較すると、今回分析した降下火山灰は角閃石をほとんど含まず、単斜輝石に比べて斜方輝石が多い大湯軽石質火山礫層の特徴をほとんどそのまま示している。また、試料採取地点は長木川沿いの最低位段丘面上にあるが、段丘構成層は粘土質土の下に河床礫層が見られるだけで軽石質火山灰流堆積物はまったく見られない。したがってこの地点は毛馬内軽石質火山灰層の非堆積地域であり、降下火山灰である大湯軽石質火山礫層のみが土壌中に残されたものと推定することができる。

文 献

平山次郎・市川賢一 (1966) 1,000年前のシラス洪水~発掘された十和田湖伝説, 地質ニュース, No. 140

内藤博夫(1966) 秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形,地理学評論,VoL.39 中川久夫・ほか7名(1972) 十和田火山発達史概要,岩井淳一教授記念論文集

大池昭二 (1974) 十和田火山は生きている ~ まぼろしの有史時代噴火を追って、国土と教育、 No. 26



3. 遺構と遺物

1. 薄状遺構

溝状遺構は全部で5本ほど発見されている。いずれも黒土の中にうすく堆積している大茂内降下 火山灰層を切って掘り込んだもので、この火山灰層より新しいものである。中から遺物などまった くなく、その性格は不明である。

溝1 (第5図右)

D15グリッドを中心に発見されたものである。東南にその端がある。形は細い船形を呈すが北側 (図上部)で右に曲っており、直線ではなく不規則なものである。中にピットが二個発見されたが、 溝に付属したものか否か不明。中は広い所で1.5m ほどあり、深さは場所によって異なる。

溝2 (第5 図左)

溝1と並行する状態で西側に発見された溝である。全体的に1より細く浅い。左右にピットがあるが、この溝とは直接関係ないものと思われる。

溝3 (第6図)

6 図にある溝は上からE 11, E 3, D, 19グリッドから発見されたものである。図のように巾は 30cm前後, 深さ20cm前後でU字状の掘り方である。この三本の溝は発見された場所が近いこと, 又中に入っている土などから同一の溝と考えられる。

溝4 (第7図)

D15グリッドから発見された遺構である。最初直線に列石を確認。それを精査したところ図のような溝状遺構になったものである。溝は浅く、振り方はU字形を呈す。列石は配石したものか、後に溝に落込んで自然に列石状になったものかはっきりしないが後者である可能性が強いと考えられる。中に小ピットがある。端々にあるピットなどを見るとこの溝に付属するものと考えられる。

溝5 (第8図)

L17、18、M1、2グリッドに南北に走る状態で発見された遺構である。溝の巾は広い所で1.5 m、狭い所で0.5mと不規則である。中に発見されたビットも不規則な配置で、この溝に付属するものとは考えられない。

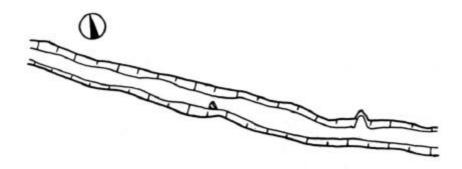
2. 土 垃

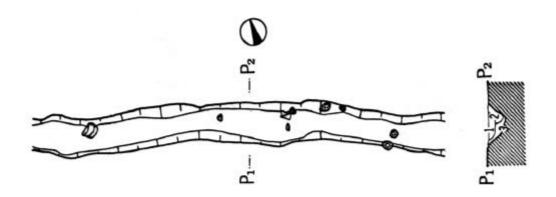
土城は各地区から発見され、その数は約17基ほどになる。土城の上に集石の伴なうもの、方形で中に石が入ったもの、円形に近い形で周囲に柱穴を伴なうもの、又円形で遺物・石等の何もないものなどがある。

土城1(第9図1)

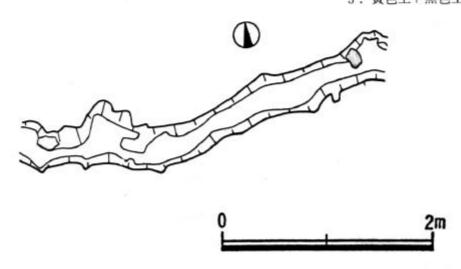
F 7 グリッドから発見された土城である。平面形は楕円形で長軸方向はNW-SEで、長径 1.3 m、短径 0.8 m、深さ 0.5 m である。中の土はロームが少し混じた黒色土で、底部にある石は焼け

第6図





- 1. 黑色土 2. 黑色土+黄色土(粘質混合土) 3. 黄色土+黒色土(")



たものであった。石の直 ぐ上にあった土には木炭 が多く含まれていた。遺 物はなく、時期は不明。

土址2 (第9図2)

F11、15グリッドから 発見された土城である。 平面形は長方形で、長軸 方向はN一Sで、長径 1.65m、短径 0.8 mであ る。土城は浅く、深さ10 cmほどである。中の土は

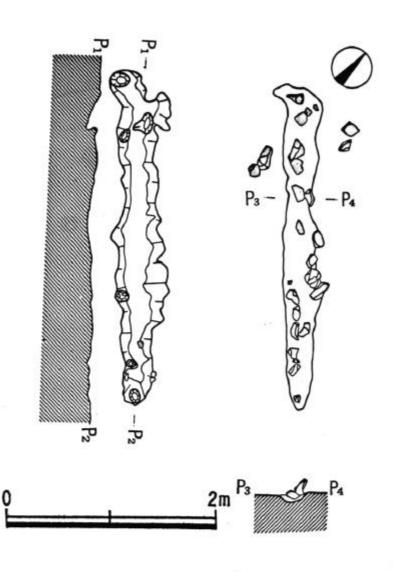
1層, 黒色土で粘性が なく, なく, 水分が多 い。

2層,暗褐色土で,少 し粘性があり, 炭化物を多く含 む。

中から遺物なく, 時期 は不明。

土城3 (第9図3)

D10グリッドから発見 された土城である。平面 形は楕円形で、長軸方向 第7図



はN-Sで、長径 2.2 m, 短径 1.3 m, 深さ 0.3 m である。中の土は

- 1層、黒褐色でしまりがよい。
- 2層a、暗褐色で、1層に比較して硬い。
- 2層6、褐色で小礫を含む。
- 3層、明褐色で、地山土のブロックを含んでいる。
- 4層, 黒色土層で、腐殖質で木炭を若干含む。

全体的に中の土は小礫を含んでいるが、特に26層は指頭大の礫が多い。中から遺物はまったくな く、時期は不明。



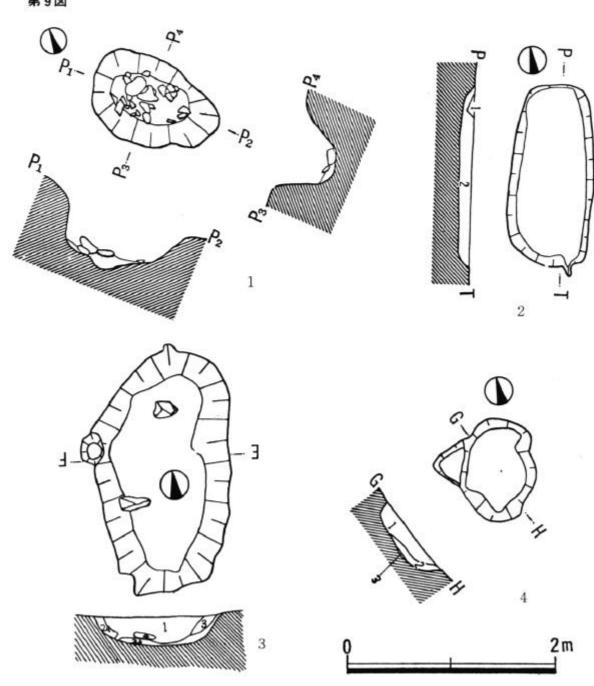
土城4 (第9図4)

D 10、11グリッドから発見された土城である。平面形は楕円形で長軸方向はN-S で、長径 $1\,m$ 、短径 $0.65\,m$ 、深さ $0.2\,m$ である。西側に三角形の掘り込みがある。中の土は

- 1層, 褐色土
- 2層,暗褐色土
- 3層, 黑褐色土

中から遺物はなく, 時期不明。

第9図



土垃5 (第10図A, B)

D18グリッドから発見された土塩である。平面形は楕円形で長軸方向はNE-SWで、長径約1.5m、短径0.9m、深さ0.3mである。中の土は

第1層, 黑色土

第2層, 黑褐色土

第3層,暗褐色土

第4層、黄褐色土でローム、木炭を含む。

中から出土遺物なし。土址の長軸の両端、それに西側(図Bの左側)にピットがある。これらは この土址と関連ありそうに見える。

10図Aはこの土城の上及びその近くにあった集石である。これは第2層の黒色土の中に含まれているもので、意図的にここに自然石を集めたものと考えられ、土城5と関連するものと見てよいであろう。集石の多くある下には土城は認められなかった。この集石の中から縄文時代後期前半の土器片が発見されており、この土城もその時期のものと考えられる。

土址6 (第10図C, D)

E15, 19グリッドから発見された集石の伴なう土城である。平面形は不整の長方形で、長軸方向はE-Wで、長径2m, 短径0.6~0.8 mで深さ0.2 mである。この土城の東端に接してさらに東側に10図Cのような集石があった。集石のある層は黒褐色土層で、下にはっきりした土城は認められないが、断面で見ると10cm前後の凹が認められる。遺物はない。この地区の地表からの地層は次のとおりである。

第1層、黒色土層で少し褐色がかり粘質が少しある。

第2層,大茂内降下火山灰層である。

第3層, 黒褐色土層で下部で礫を含む。

第4層, 褐色混土層でやや粘質, 小礫含む。

土址7 (第11図)

J11グリッドから発見された土城である。平面形が楕円形で、長軸方向はE-Wで長径1.3 m、短径0.5 m、深さ0.36mである。土城を掘った土が右側に積まれている。中から遺物はまったくなく、時期は不明だが、これと同じような土城の掘り方が、大湯環状列石周辺遺跡で発見されている。

土址8 (第12図)

K18グリッドから発見された土城である。平面内は円形で、直径 2.1 mある。深さ 0.2 mで中に 自然石が 5 ヶ入っている。壁に接して周囲にピットがあり、中には中心部に向って傾斜しているも のもあり、この土城に伴なうものと判断してよいであろう。覆土上部から中世陶器が発見されたが、 この土城の時期を決定づけるものとは考えられない。

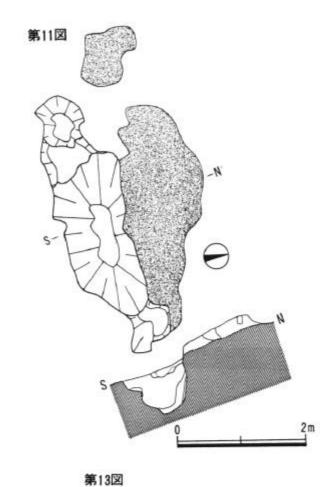


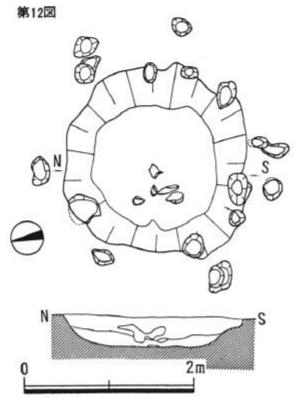
土址9・10 (第13図)

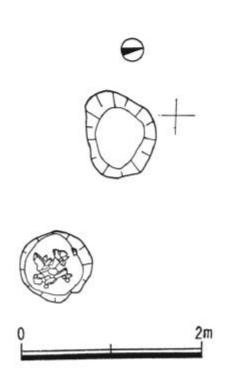
土城9はM13, 17に, 土城10はM13グリッドに発見されたものである。9は楕円形で長軸方向はE-Wで深さ0.3 mほどである。中に何もなく性格は不明。

10は円形の土城で径 0.8 m, 深さ 0.3 m ほどで、中に礫が入っている。

他に不整形の土垢がいくつか発見された が省略す。







3. 烧土遺構

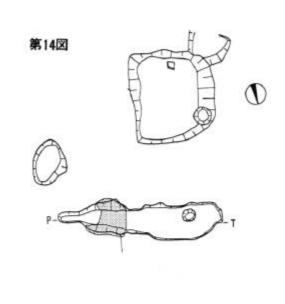
ここでいう焼土遺構とはその性格は不明だが焼土を伴なう種々の遺構――例えば焼土があるけど住居跡の炉や、カマドとは考えられず、焼土とともに少しの凹みや、ピットを伴なうものをいう。 発掘した地区のL区、P区、R区の竪穴住居跡等の遺構の多い所に認められる。したがって先に住居跡の炉や、カマド以外といったが、住居の建替えなどによって、古い住居跡の炉やカマドの可能性もまったくないことはない。しかし現段階ではそう考える積極的な裏付けになるものがない。

焼土遺構1 (第14図)

この遺構はL1,2グリッドから発見されたものである。東西方向に長く3m前後の浅い落込みがあり、東側に行くにしたがって細くなる。この先端部に近い所に焼土がある。焼土のある範囲も落込みと同一で、これと関連あるものと考えられる。深さ10cm程度で、西側に小ピットがある。これと直接関係があるか否か不明だが、南側に1辺1.7mの方形の土拡があり、また焼土遺構先端(東側)に近い所にピットが認められる。

焼土潰構2 (第15図)

R 3 グリッドから発見された遺構である。焼土が2 地点に分布する。南側(図では下方)の焼土の直ぐ西側に方形のピットがある。この焼土と関係あるものと認められる。北側の焼土は何であるかは





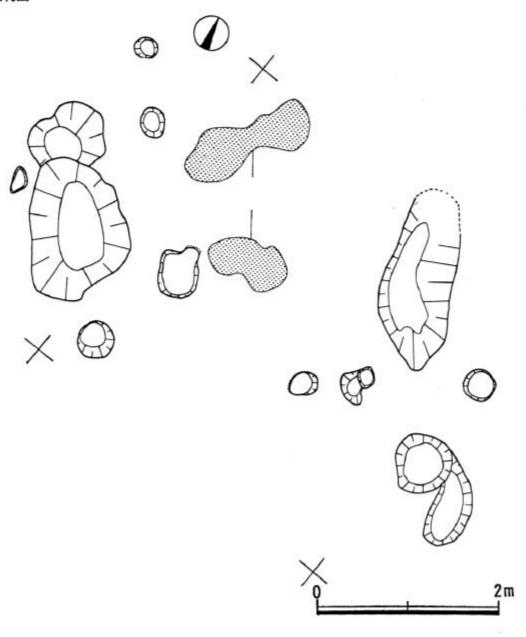
不明。これら二つの焼土の南西側に楕円形の土 塩が認められる。これらとの関係については不明。 焼土面及びその下には1のような落込みは認められなかった。

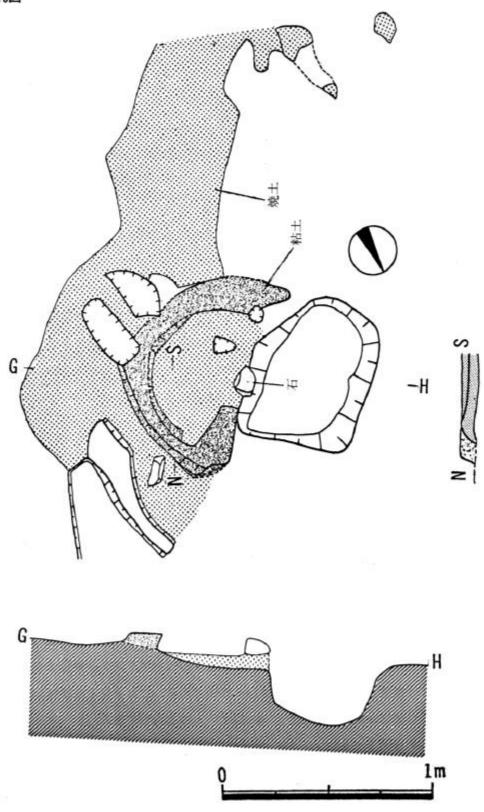
焼土遺構3 (第16図)

Q17グリッドに発見された遺構で、第4号住居跡の直ぐ南にあたる部分にあった。焼土が広く、住居跡の床面が焼けたような状態で水平に広く分布している。その中に粘土で半円形に土手をきずいた構築物があり、その中には焼土が厚く堆積していた。焼土の直ぐ横に方形のピットがあり、中に焼土が堆積しており、焼土遺構とセットをなすものと考えられる。ピットと焼土遺構の接する地点に石が置かれていた。粘土で半円形に造られた土手状の構築物はドーム状をなしていたらしく、内側に傾斜している。半径1m、土手の巾18cm程、高さ8cm程残っている。外側に土手状の高まり、

溝状の遺構らしいものが認められ、そこから鉄くずなども発見されており、この遺構は鉄製品を製作する遺構と考えた方がよさそうである。

第15図





4. 竪穴遺構(第17図)

竪穴潰構1 (第17図)

L10グリッドに発見された遺構である。この付近は攪乱がひどく、なかなか遺構がはっきりしない場所であった。平面形が長方形をなし、長径4m、短径1.1m、深さ0.2mである。南西隅の外に焼土がある。中の土は黒褐色で木炭が多く含んでいた。床面はしっかりしない。

竪穴遺構2 (第17図)

L9グリッドに発見された遺構である。平面形は不整の長方形で、長径2.8 m、短径2 m、深さ6 cmで浅い。西側壁に近い所で少しの掘り込みがある。西北隅にピット1 個。中から遺物が全くなく、時期性格は不明。

5. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第17図·図版 2-1)

L9グリッドに発見された竪穴住居跡である。平面形は隅円方形に近い。大きさは3.8×2.6 m,深さ0.2 mである。長軸方向はE-Wで、東側の壁が少しゆるやかである。壁に沿って大きなピット。壁に近い床面に小さなピットがいくつか認めることができるが、大きなピットはこの住居跡のものではなく、住居外にある同大のピットと同じ性格のものであろう。中から遺物、又炉などの痕跡など認めることができなかった。近くの土中から、縄文後期(十腰 I 式)の土農が発見されており、その時期の住居跡と見てもよいかも知れないが、はっきりしない。

2号竪穴住居跡 (第18図・図版3-1)

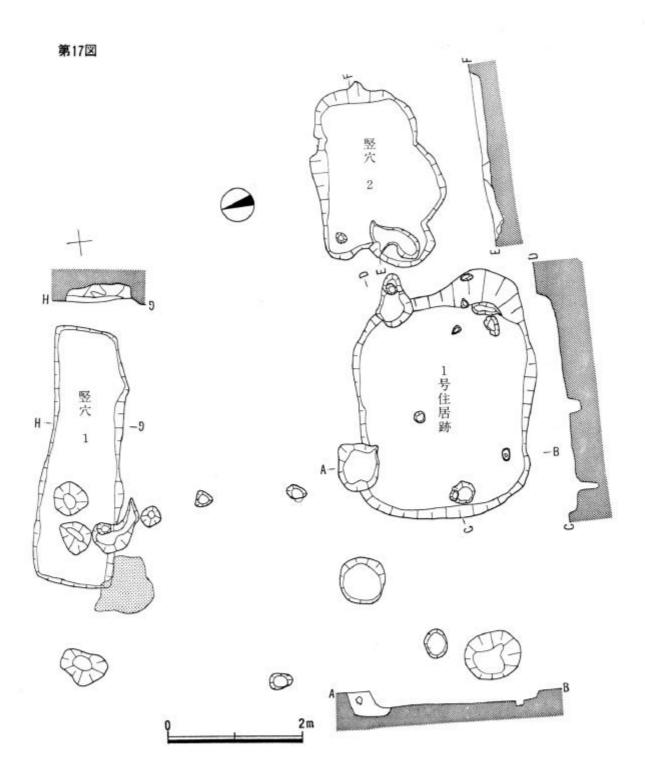
Q10, 11, 14, 15グリッドに発見された竪穴住居跡である。平面形は方形で3.2×3.1 m, 深さ6cmで浅い。屋内に人頭大の自然礫が20数個散在している。床面は北の隅で地山の礫層が出ていてデコボコであるが、他はしっかりしたものである。カマドと称するしっかりしたものは認められないが、南側隅に近い所に石や土器で囲まれた焼土があり、その南壁が三角状に外に突出していることから、これがカマド、および煙道の役割をはたしたものと思われる。住居内にあるピット、外にあるピットも皆20cm内外で浅い。

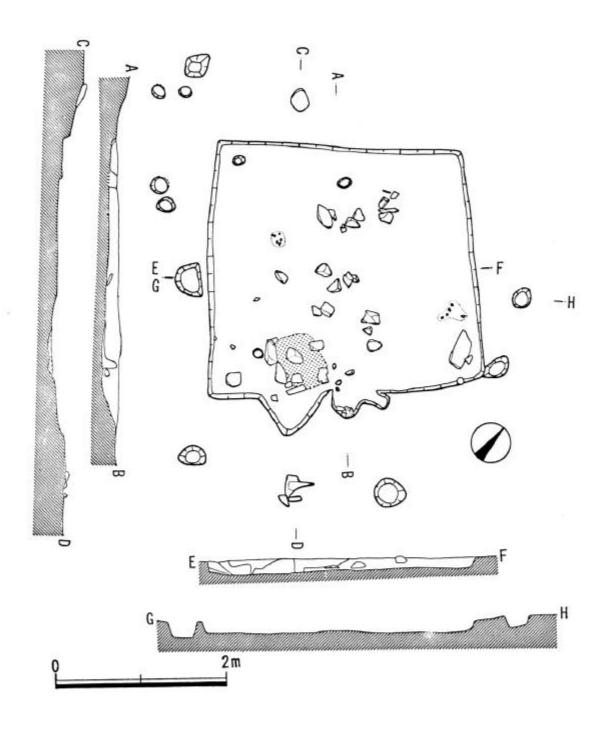
出土遺物

本住居跡からの出土品はすべて土器で、土師器である。器種全体を完全に推定できるものはないが破片からできるだけ復原して図化したのが第19・20図である。これを見ると器種は甕形土器が殆んどである。大きく口径15cm前後のものと、20cm以上のものと大別できる。

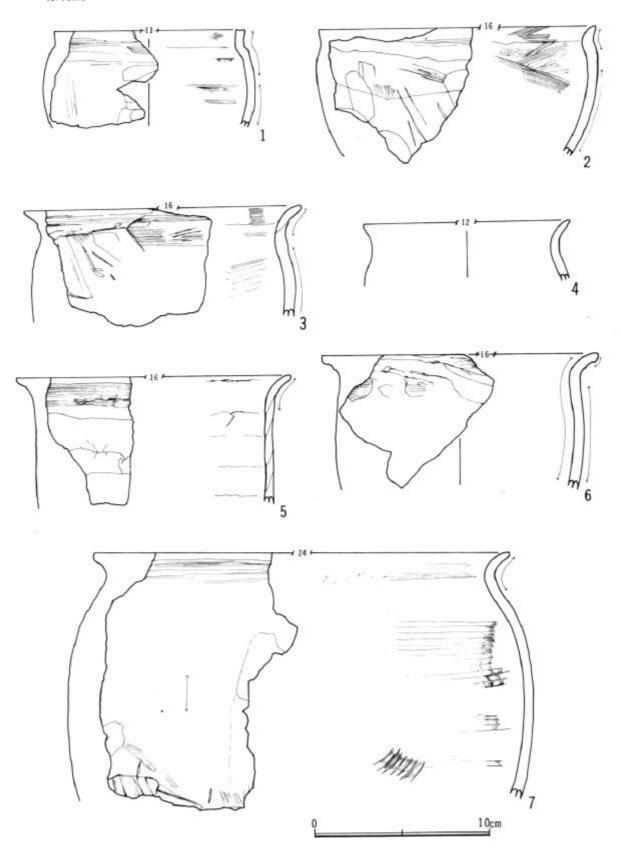
15cm前後のもの (第19図1~6)

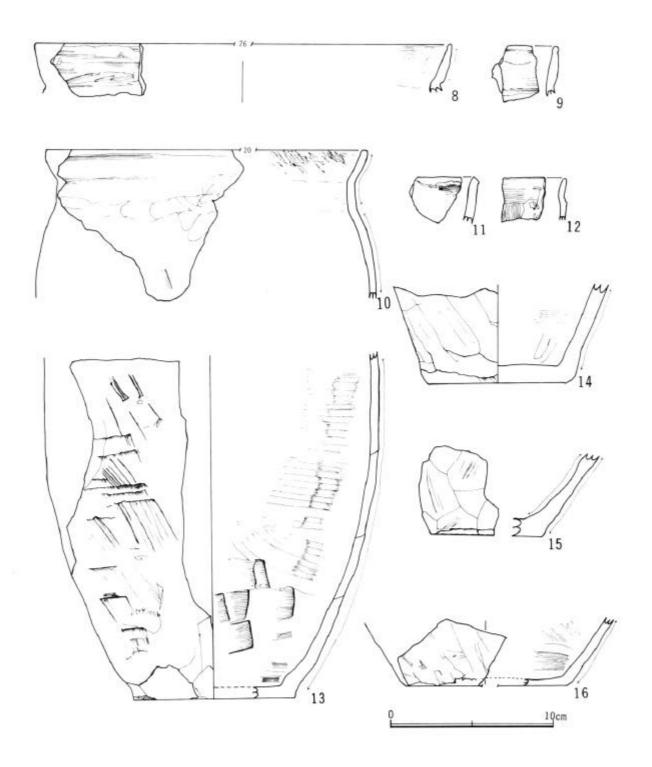
この中でも1・2のように胴部から頸部にかけて内反してきて、口縁部でほんの少し外反するものと、3~6のように口縁部で外反するものとがある。土器は粘土帯の積上げ(輸積みか、まき上げか不明)によっておこなわれ、器面調整は口縁部(頸部から上)はヨコナデにより、それ以下は荒いヘラケズリによっておこなわれ、3を見るかぎりヘラケズリの方向は底部から口縁部方向にお





第19図





こなわれ、頸部でヘラが止っている状態がよく認めることができる。 1、2 は内面は比較的きれいに仕上げられているが、5 は内外とも粘土帯積上げの状態が認められる程度の調整である。口唇部の仕上げも1 のように平なもの、2 のように尖るもの、6 のように外に厚くなるものなどある。胎土に5 mm前後の砂粒が入るのも特徴である。

20cm以上のもの (第19図7, 第20図8, 10, 13など)

器面内外の調整の方法は小形のものと同様である。第19図7のように「く」字状に強く口縁が外反するもの、第20図8、9、10のように少し外反し、内側が直線的になるものとがある。10のように頸部が1.8 cmほど長いものもある。胴部から底部にかけては荒いヘラケズリである。これらの土器で特徴的なのは底部が砂底であることである。これは土器を成形する時、砂の上に置いて作ったものと解釈できる。

この住居跡の覆土は大茂内降下火山灰が他の土と混じて入りこんでおり、火山灰層より新しい住 居跡と考えられる。

3 号 竪穴住居跡 (第22図・図版 2 - 2)

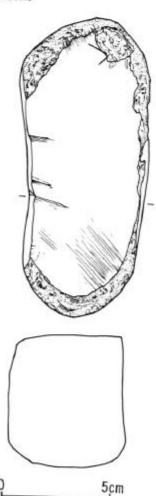
Q18グリッドに発見された竪穴住居跡である。2号の西側、4号住居跡に接して北側に位置し、4号住居跡の上に設けられたもので、4号住居跡より新しいものである。平面形は楕円形で、長軸方向はE一Wで、長径3m、短径2.2m、深さ8cm。小形で浅い住居跡である。柱穴と思われるものが4個あり、いずれも深さ20cm前後のものである。屋内には炉跡などの施設は認められず碟3個、砥石(第21図)1個発見され、土器は発見されなかった。

砥石は卵形の自然石を利用したもので四方とも使用されている。この住居跡は4号住居跡より新しいことから、2号住居跡 と同じ時期のものと考えられ、2号、4号住居跡はちゃんと方 形でしっかりした形をなしていることから判断すると住居では なく、小屋的な性格のものと解釈されよう。

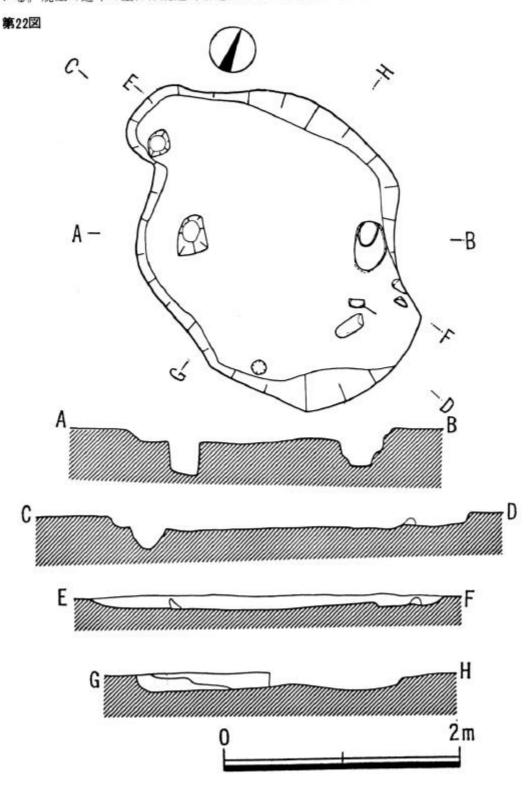
4 号竪穴住居跡(第23図·図版 3-1)

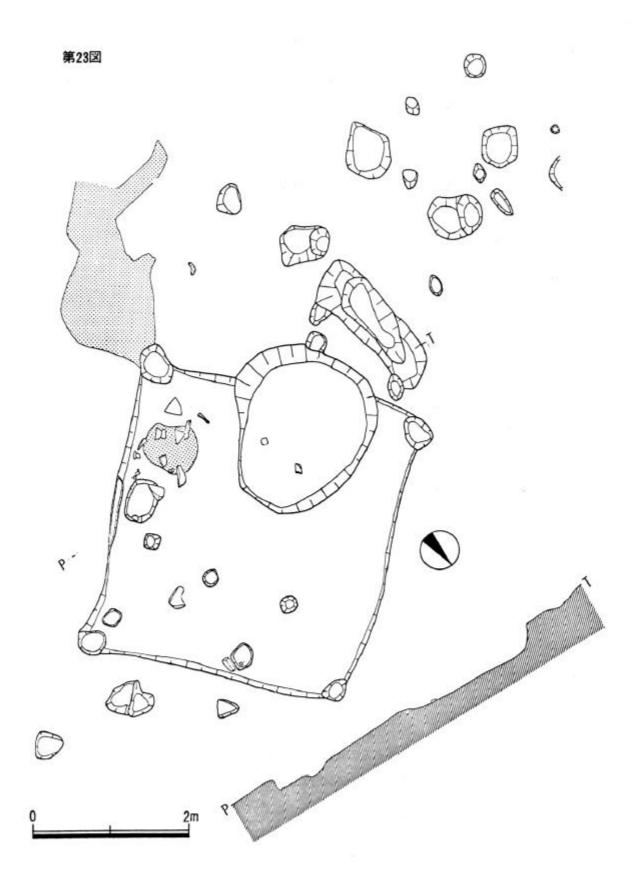
Q17, 18グリッドを中心に発見された竪穴住居跡である。 3 号住居跡の下に北東壁の1部があたる。したがって3号住居跡より古いことになる。平面形は方形で4.8 m×4.6 m, 深さ10 cmでしっかりした住居跡である。南西壁を切っている楕円形の竪穴遺構はこの住居跡より新しく作られたもので、この住居跡と直接関係はない。柱穴は4隅にしっかりとあり、深さ30cmで

第21図



ある。他に屋内床面に4個の浅い柱穴がある。実測図左側壁に近い所に焼土、礫・土師器が発見された。カマドと思われる施設はないが、2号住居跡同様、この焼土のある地点がカマドの役割をはたした場所と考えられ、その横にある穴はそれと関係ある施設と考えられ、近くから土師器が出土している。焼土の近くの壁には焼道的な施設はまったく認められない。





実測図上部の壁を切って作られた遺構は断面P-Tでわかるように、床面が南に向って深くなり傾斜している。長径2m, 短径1.9mで、深さは床面から自然に傾斜して、南側の壁で30cmほどある。この遺構の中からの遺物は自然礫1個だけである。

出土遺物 (第24回, 25回)

この住居跡から出土した遺物もすべて土師器で、器形は甕形である。2号住居跡同様に破片から 口径を推定復原した結果、10cm前後のものと、15cm前後のもの、20cm前後のものと三種に区別でき る。土器の整形の仕方は2号住居跡出土品と同様である。

口径10cm前後のもの(第24図1,3,6,7)

口縁が1のように外反するもの、3のように直立したもの、6、7のように少し内傾するものなどがある。6、7は非常に薄手のもので、これには胎土に砂粒が入っていない。7は赤褐色を示す。

口径15cm前後のもの (第24図2, 4, 5)

前者のものが小形の甕とすると、これは中形の甕であろう。4のように「く」字に外反するもの、胴部のヘラケズリは、下部から口縁に向っておこなわれている。5は頸が短かく、小さく、鋭く、外反する口縁をもつ甕である。頸部で段のつく感じのものである。4、5とも胎土に砂粒を含む。

口径20cm以上のもの(第24図8, 第25図9~11)

8は「く」字状に外反し、口縁に向って少し内反するような感じで作られたもので、胴部はかなり張り出すものと推測される。第25図 9~11は強引に推定したもので、全体像は不明。

底部の破片 (第25図12, 13, 14)

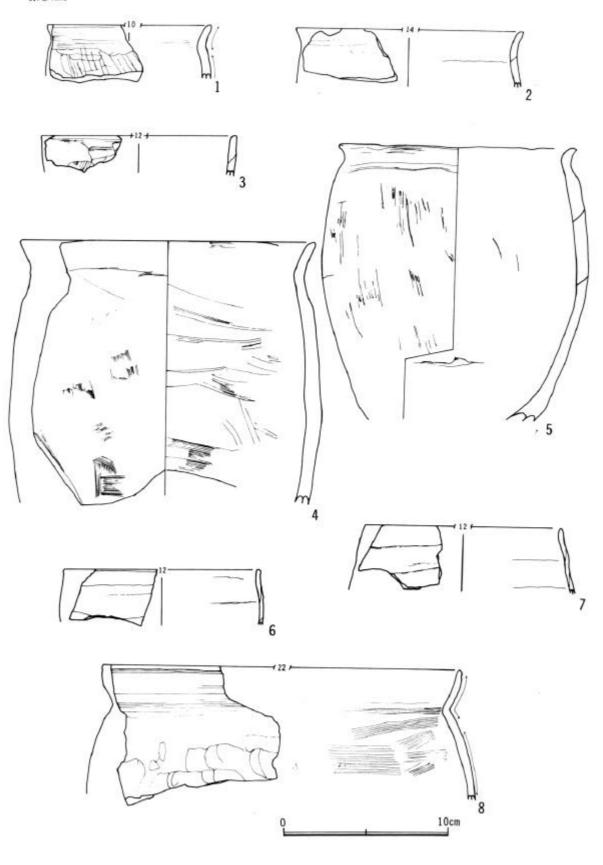
底部の破片が3点出土している。12は木葉痕のあるもので、この発掘調査で発見された唯一のものである。13、14は砂底の底部である。

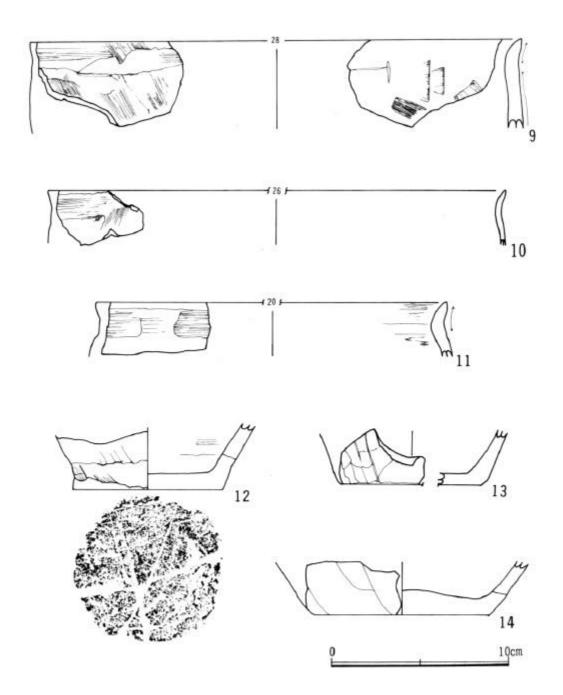
本住居跡の出土品は以上である。出土遺物は2号住居跡のものと類似し、又住居跡に入っている 土も大茂内降下火山灰が混入したもので、火山灰より新しく、2号住居跡と同一時期のものと推測 して間違いないであろう。

5号竪穴住居跡(第26図)

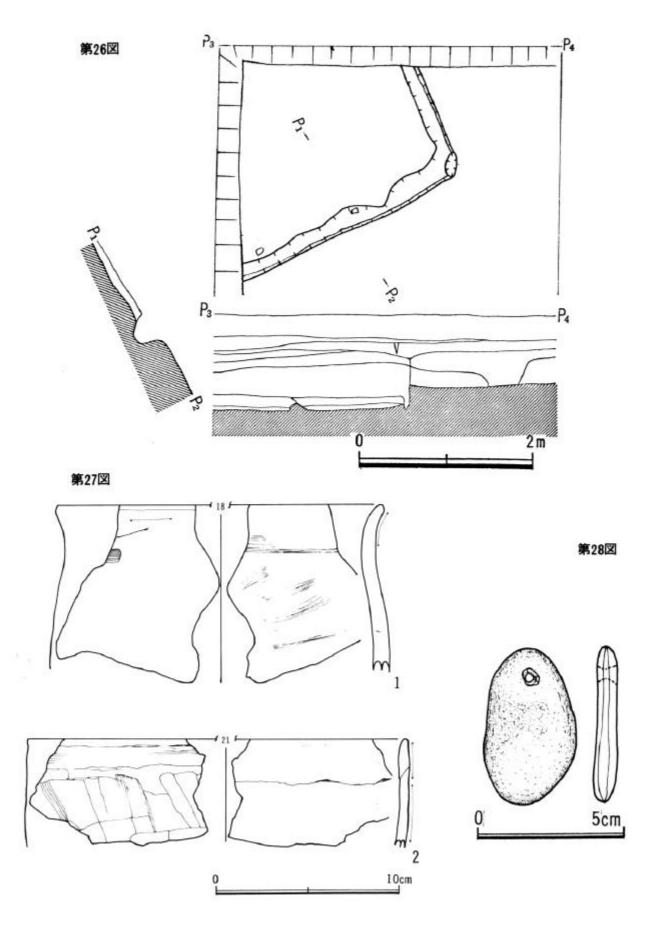
W17グリッドに発見された住居跡である。道跡計画路線の南端に発見され、1つのコーナーだけ確認しただけである。発見されたコーナーは北東隅で、壁に沿って周溝がある。隅に柱穴と思われるピットがあり、この点は4号住居跡に類似する。周溝は巾20cm、深さは床面から12cmほどある。

発見された地点は水田で、水田下80cmほどで深い。断面を見ると3層下面で住居の掘り方が確認できる。このあたりが当時の地表面であった可能性がある。そうすると竪穴の地上から床面までの深さは60cmほどになる。





出土遺物は土師器 2 点、周溝から、自然礫に貫孔のある遺物が 1 点出土。土師器は甕形土器で、 口径は18cm前後のものと、21cm前後のもので、他の住居跡と大差ない(第26図~28図) 6 号竪穴住居跡(第29図・図版 4)



U 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, V 2, 3 グリッドに発見された竪穴住居跡である。平面形は方形で、12m×11.2mで長軸方向はE-Wで、深さ10cm-20cmほどある。

この住居跡は非常に大きく、屋内にいろいろな施設があり、住居跡とともに作業場を伴なった感じのするものである。平面形は方形であるが、東側壁は直線で結びつかず、図のように「形にずれる。ここから屋内に自然に傾斜し、床面もしっかりしており出入口と考えられる。南壁の掘り方は浅く、周溝があったため南壁を確認できた。また西南壁ははっきりしないが、この地区に自然礫が多くあり、壁の延長線(南)でその自然礫が内側でなくなるので壁と推定した。屋内施設はいろいろある。

柱穴は深いもの60cm~10cm前後のものまであり、図には30cm以上の深さのものはその横に注記し、他に大きな穴に深さを示した。柱穴のあり方は不規則(深さ)であるが、一部南北線上に一列になるものもある。注記のないものは20cm以下の深さである。

焼土が多く、屋内に9ヶ所ある。一部床面の焼けているものも含むが非常に多い。中でも柱穴の 周囲が焼けているもの6ヶ所ほどあるのが注目される。他にA~Cと注記した所にある。これは浅い2cm~5cmほどの掘り込みがあり、その周囲に焼土があること。特にAの掘り込みと焼土のまわりに径5cm前後のピットが伴なうのが気になる。

カマドと考えられるものが東壁入口の直ぐ左側にある。少し掘り込み、礫を敷いたものである。 礫は皆焼けている。この北に方形の穴(深さ23cm)がある。これには木炭層と粘土層が交互に堆積 していた。木炭層には藁の焼けたようなものが多く含まれていた。

断面 $P_1 \sim P_2$ で示した所には卵形の浅い凹みが四個連続してある。周囲に木炭が付着している。 床面に接して自然石でも形の整ったものが $3 \sim 4$ 個ほどまとまって置かれた状態であり、注目される。

床面は全体的にしっかりしており、一面である。西側に二つほどL形と、円形に段のつく所がある。L形のものは北で自然に床面が一緒になり、別の家屋の壁とは考えられず、間仕切りの跡と考えられる。ここから砥一・鉄器の出土例が多い(第30図参照)。円形のそれは性格がはっきりしない。このL形の南側の床面は、他の床よりふみかためられた様子がない地域であった。これも屋内の使用を考える参考となろう。図破線で示した範囲は床面直上に木炭層のあった範囲を示す。

床面までの地層は次のようなものである。

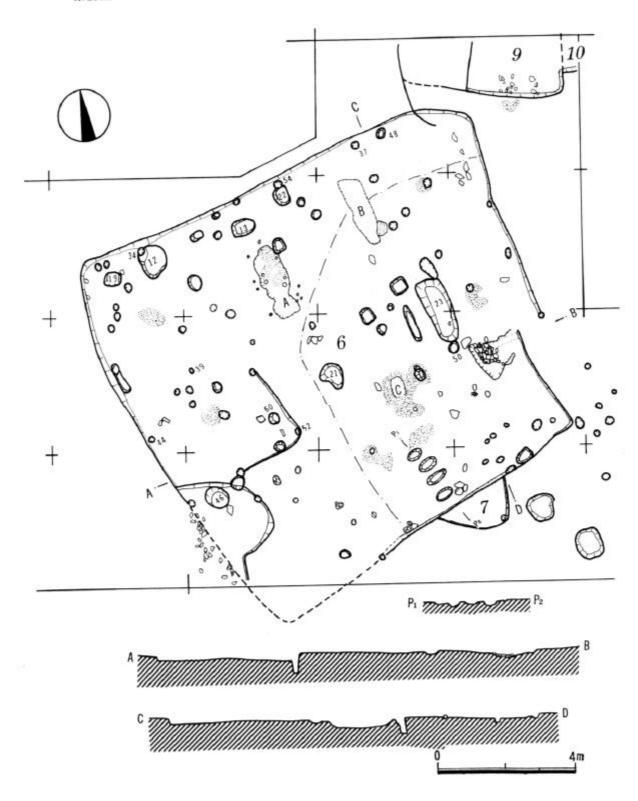
第1層, 暗灰色土 (耕作土)

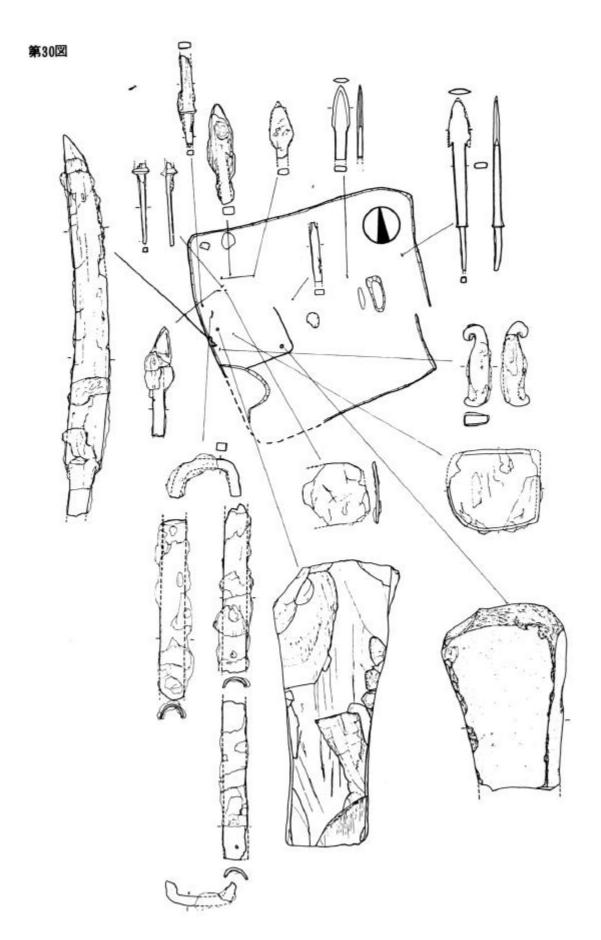
第2層, 黑色土

第3層、黒褐色土で下の層との境界に鉄分が層をなしている。

第4層、暗褐色土でローム、木炭、浮石が混じる。

以上の層序をなして床面に至る。第4層には大茂内降下火山灰層の浮石が混合した状態で入りこ んでいることから、この住居跡も火山灰層より新しいものである。

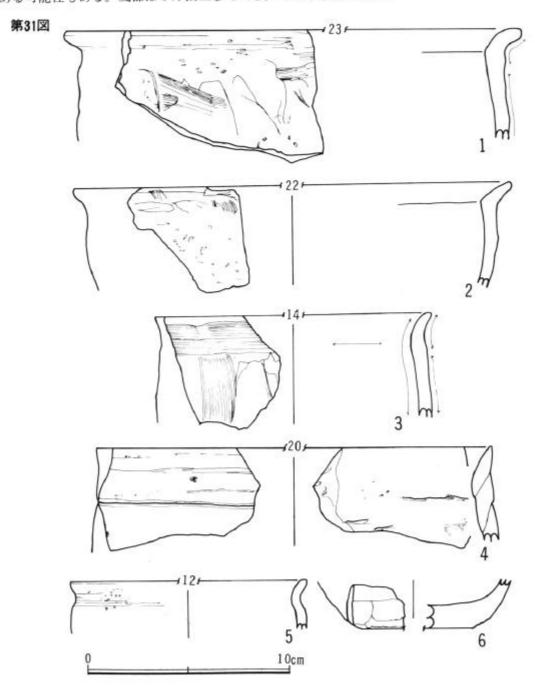




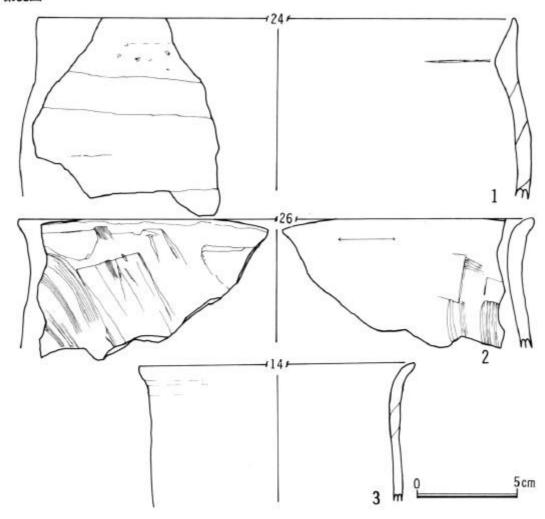
出土遺物 (第31~36図)

住居跡が大きいわりに、土器の出土量は少ない。この住居跡から出土した遺物は土師器、それに 鉄器である。鉄器は住居跡の西側壁に近い所から比較的多く発見された。又同地区から砥石も2個 発見され、鉄器との関連を想起させる。

土師器は図化できるもの数点ある(第31図)。ここからも甕の破片だけである。口径13cm前後の小形のもの (第31図 3 , 5 ・第32図 3),20cm前後のもの(第31図 1 , 2 , 20)。25cm前後のもの (第32図24, 25) と三種ほどある。胎土・焼成など他の住居跡出土のものと同様である。第31図 2 は鍋である可能性もある。底部は 1 片出土している。やはり砂底である。

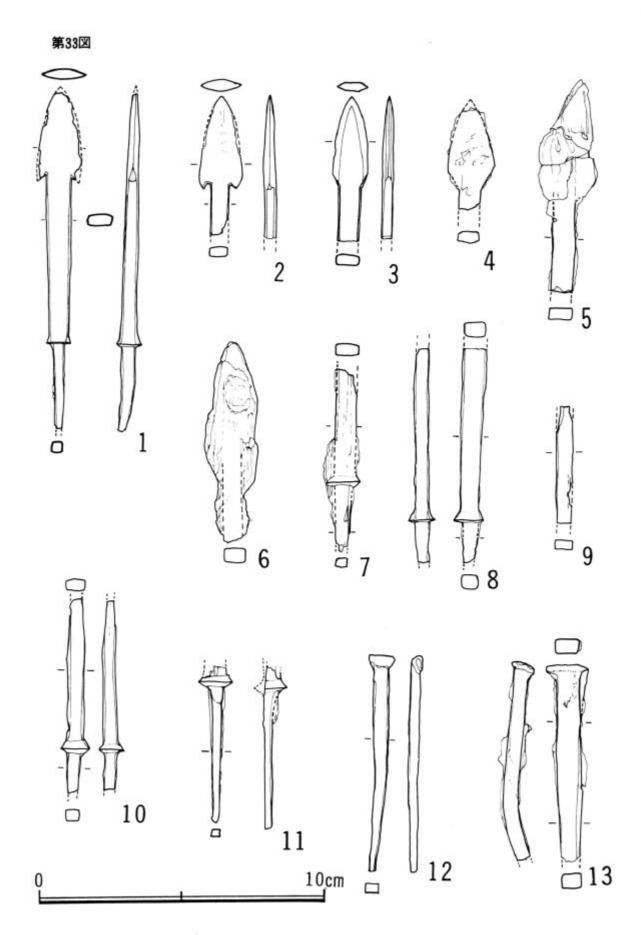


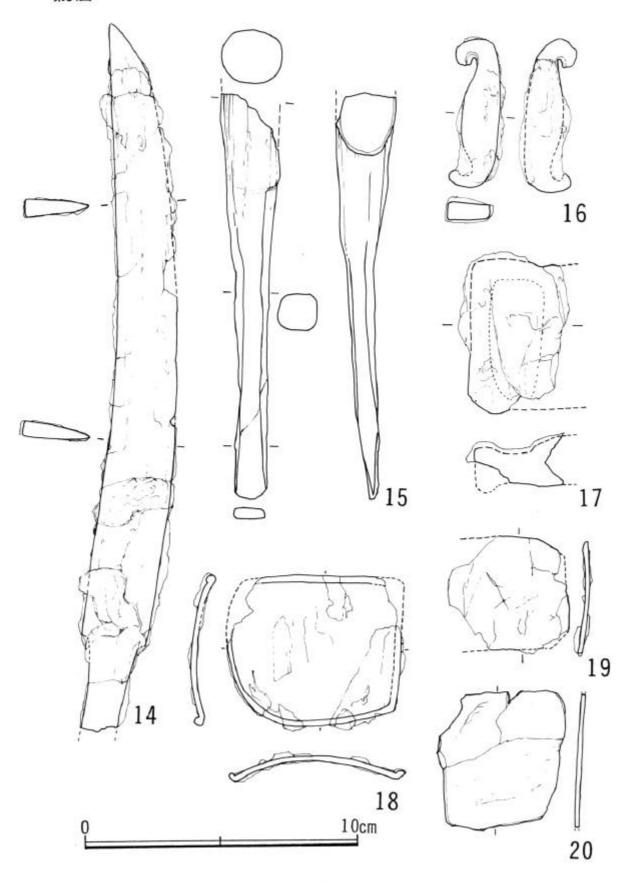
第32図



鉄器 (第33図, 34図)

鉄器では鉄鎖、釘、小刀、火打金などである。鉄鏃が最も多く10点ある。後で3と8が同一個体であることがわかった。1は完全、3と8をあわせるとこれも完全に近い形となる。それを見ると発見された鉄鏃はすべていわゆる長頸鏃で、頸と中子との接するところにそろばん玉のような突帯がつく。頸の断面は長方形、中子の断面は方形に近い形をなす。鏃の部分は1、2のように逆刺(かえり)のつくもの、3、4、5のようにつかないものとがある。鏃全体の長さは12.5cm前後である。12、13は釘で、いずれも断面長方形で頸部が平にあるもので、12は折り返した痕跡を認めることができる。第34図14は小刀で、現存する長さは26cm、身の長さは22.5cmで、反りは8mmほどある。15は槍か何かの中子と推定されるものである。16は長さ5.5、巾1.4 cmの火打金である。秋田県内で発掘で発見されたのは初めてでめずらしいものである。類似品は広島県草戸千軒町遺跡から発見されている。16~20の鉄器は名称その他不明である。18はうすい鉄板で図のように縁どりしてあり、少し湾曲するものである。他に第35図21は図のように竹を半截したような断面をもち、先端に小孔がある。出土状態から見て21A、21Bも同一個体か、あるいは結んで使用したものと考えられる。





上,下の鉄器(21A, B)は断面方形でU字状をなすものである。用途その他は不明。

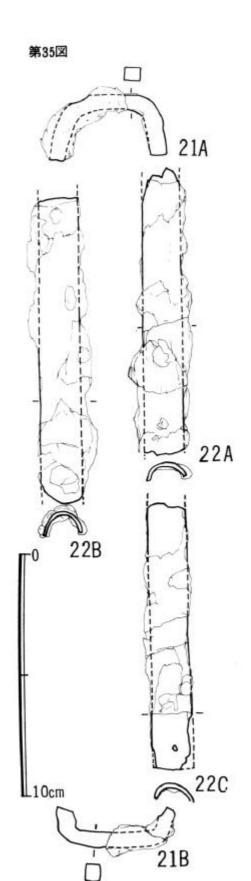
石器 (第36図)

本住居跡から発見された石器は2点あり、いずれも 砥石である。大形のもので2点とも破損して全体は不 明だが長さ20cm以上ある。いずれも四面を使用してお り、かなりすり減っている。

出土した地点は住居跡の西側のL字状に区切られた中で、この近くから鉄器が沢山出土した所にあり(第30図)、この家屋内の利用の仕方を考えさせる場所である。

第36図





7号竪穴住居跡 (第30図)

U9グリッド、すなわち、6号住居跡の南側に浅くコーナーが発見された。これを7号住居跡とした。6号住居によって大半が切られ、ほんの少ししか残っていないが、このコーナーの様子から判断すると平面形は方形と推測される。出土遺物なく、6号住居跡より古いというだけで時期は不明。

8号竪穴住居跡(図版3-2)

T8グリッドに発見された竪穴住居跡である。水田造成の時相当削られたらしく、床に近い部分が残っていた。平面形は方形で、一辺4m×3m、深さ10cm、長軸はNE-SWである。床面は礫があってはっきりせず。南西隅と、東壁にピットがあり、東壁のピットの近くに焼土・土器があった。この付近にカマド的な施設があったものと思われる。他に施設らしいものはない。

出土遺物 (第37図)

土師器甕の破片が数点出土している。口径20cm内外のもので、口縁部が横位に整形され、その後で胴部はヘラケズリによって整形されている。3は口縁が直立し、横位の整形で少し段がつく。2は頸部がゆるやかなカープを描いて外反する。底部4は砂底である。

9号竪穴住居跡(第30図)

U16グリッド、すなわち、6号住居跡の北側に発見された竪穴住居跡である。一部攪乱されていて不明な点が多い。住居跡の南壁の一部が確認された。ここの上(壁の上)に焼土があり、それが住居の内側まで達しており、カマド的な施設があったらしく、屋内に礫が多くあった。中から土師器胴部破片数点発見されたが、図化できるものはなかった。胎土・焼成から見て他の住居跡と同様なものであった。

10号竪穴住居跡(第30図)

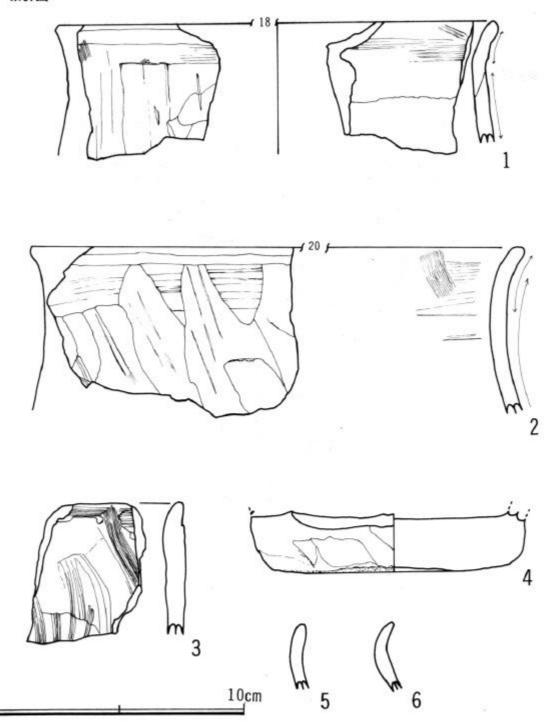
U16グリッドから発見され、9号住居跡の東側に、9号住居跡と重なっている住居跡である。道路幅がこれが北限であるため追求は不可能であった。9号住居跡との関係は北側の断面観察によって9号住居跡の方が10号住居跡より新しいことがわかった。9号及び10号住居跡とも壁の状態から、平面形は方形と考えられる。柱穴その他屋内施設は発見されなかった。又、この住居跡の遺物もない。

その他の遺物

縄文土器 (第38図, 第39図, 第40図)

縄文土器は発掘区全域から点々と発見されており、この地域を広く利用していたことが考えられる。特に1号竪穴跡の近く、2号~4号住居跡の近く、6号住居跡の東側の地区に比較的多く発見された。発見された土器はすべて縄文時代後期初頭の十腰内I式のものがほとんどである。その主なものを簡単に紹介し、他は図を見て判断してほしい。

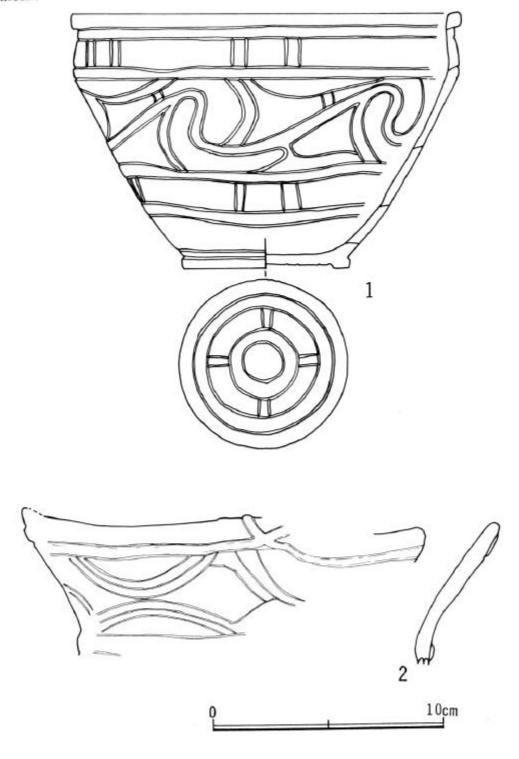
第37図

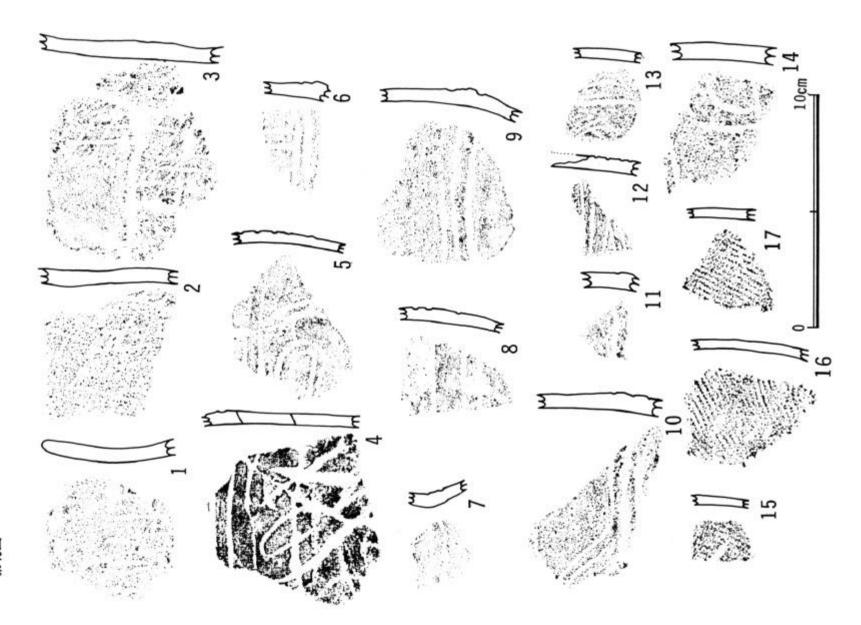


第38図1は口縁が平で、頸部は垂直になっていて、そこから底部にかけてゆるやかなカーブを描いて底部に至る浅鉢である。口唇部が外側に厚くなり、底部は上底風になっている。文様は平行沈線2本で構成され、頸部と胴下半部に平行沈線が2組横位に施され、その間に垂直に沈線が施され5区画され、この上下の横位の沈線間に入組文状の文様が沈線で5回くりかえされている。底部にも文様が施されている。U3グリッド3層出土。2は4つの波状に縁をなす土器で口縁部に

は隆帯が、頸部以下は2~3条の沈線で弧状に文様が施されている。この土器の胎土は細砂が混じている赤褐色の土器である。第39図・40図は後期の土器の網目状文、縄文の破片を図示したものである。

第38図





.

.

- 46 -

石器 (第41図, 42図, 43図)

石器も縄文土器同様各地区から出土。種類は石鏃、石槍、石錐、石匙、石箆、掻器、凹石などで、別表のとおりである。2の有柄の石鏃にアスファルトが付着している。6の石錐は尖端部をしっかりつくっており、一般の石錘と形が異質である。7は破片であるが、その形などから石匙と推定した。

⊠No.	器	種	出土地区	層 位	石	質	備考
1	石	鍼	K 18		頁	岩	
2	石	鏃	表 株		頁	岩	アスファルト付着
3	石	鏃	L 17	Ш	頁	岩	先端・基部に火熱のハジケあり
4	石	凝	W17	V	頁	岩	
5	石	槍	P 16	浮石層下礫層中	頁	岩	
6	石	錐	R 13	Ш	頁	岩	
7	石	匙	P 12	III	頁	岩	
8	石	匙	W17	v	頁	岩	
9	石	篦	K 6	溝状遺構埋土	頁	岩	
10	石	篦	E 14	Ш	石	英	
11	搔	部	W 9	I	頁	岩	
12	掻	3.0 66	P 12	III	頁	岩	
13	搔	器	Q 1	III	頁	岩	
14	掻	器	W11	П	頁	岩	抉込みあり
15	掻	器	L 17	Ш	頁	岩	抉込みあり
16	搔	器	U 3	П	頁	岩	
17	掻	器	Q 1	Ш	頁	岩	
18	[ii]	石	U 3	ш	安山	山岩	

須恵器(第44図)

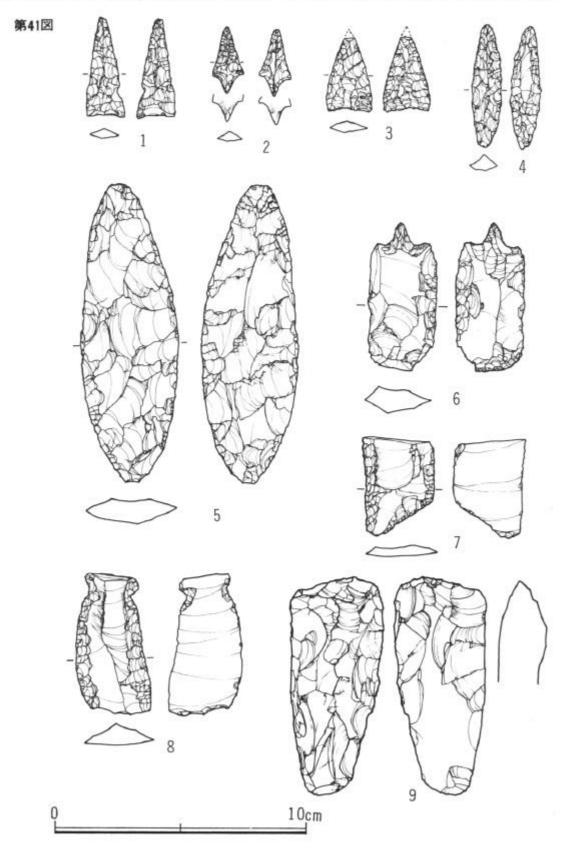
全て破片で、甕の破片と思われる。1は櫛目の波状文があり、その後にロクロ整形がおこなわれ 器面に凹凸が認められる。他は胴部の破片で叩き目がある。

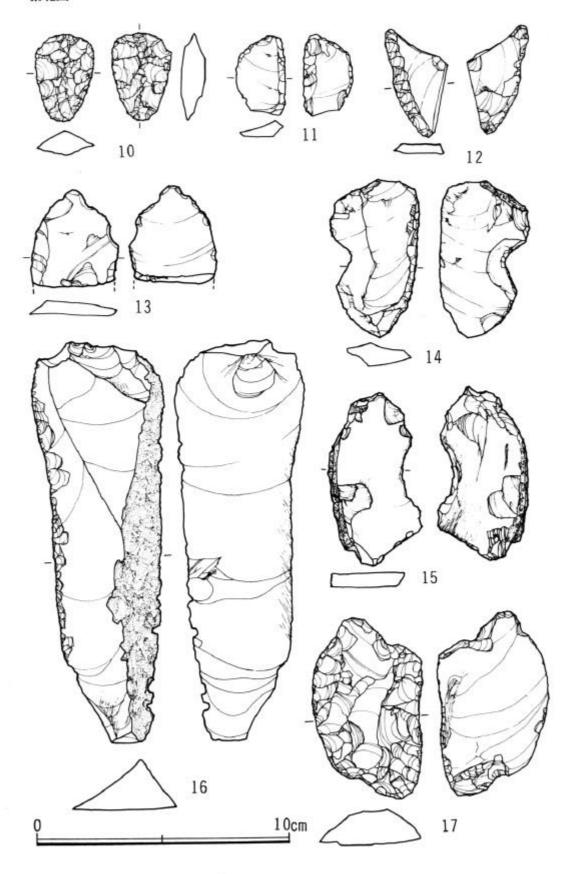
陶器(図版)

陶器は6片発見されている。すべて耕作土など表土に近い所からのもので、中世から近世のもの と思われる。

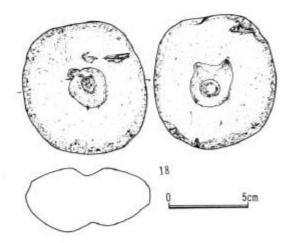
鉄器 (第45図)

他の地区から4点の鉄器が出土している。1、3は同じように断面が長方形をなすものである。 2は釘の破片と思われる。4は先端が折れ曲っているが、これが本来の姿なのかよくわからない。





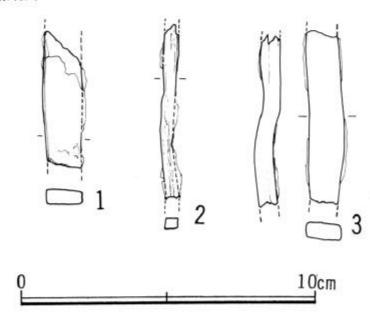
第43図

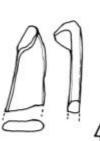


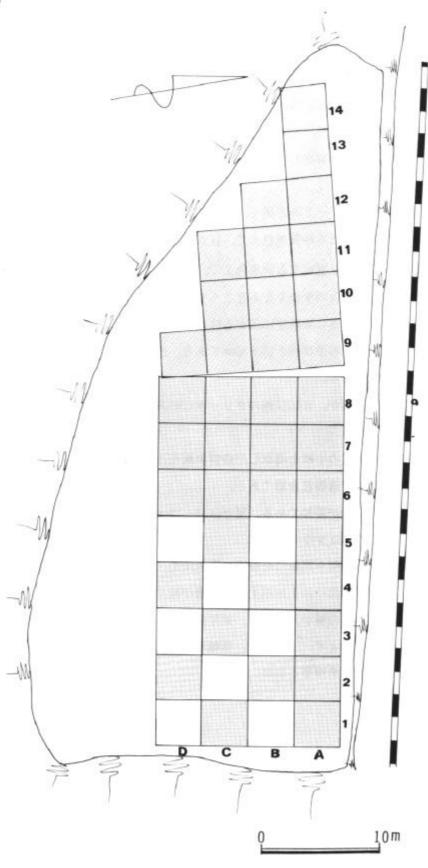
第44図



第45図







Ⅲ. 第 2 次 発 掘 調 査

1. 地 質

調査地区の土層図を第47図に示した。

第 I 層は耕作土で、粘質の黒色土である。乾燥すると灰黒色になり、かなり硬くなる。耕起が包含層にまで及んでおり、遺物が混在している。層厚は場所による変化はあまり大きくなく、10~15 cmである。

第Ⅲ層は水田下の沈澱層で1~2cmと薄く、場所によっては全く認められないところもある。 第Ⅲ層は、沈澱層下に見られる砂質黒色土で、B9グリッドにのみ見られた。

第 \mathbb{N} 層は $2 \sim 3$ cm大の小礫を混在する灰黒色土で、遺物包含層である。層厚は $25 \sim 35$ cmで、場所によっては小礫の混在する割合の少なくなるところもある。B 7, 8, 9, 11, 12, C 7, 8, 9, 11グリッドには、グリッド全体に無秩序に広がる性格不明の礫群(こぶし大 ~ 30 cm径の川原石)が見られたが、そのレベルはこの第 \mathbb{N} 層下 $15 \sim 30$ cmである。遺物の大部分は、その礫群中に混在するか、その下層に包含されている。

第 V 層は砂質褐色土であるが、B 10以西のグリッドにのみ見られるものである。層厚は最大約10 cmと薄いが遺物包含層である。

第Ⅵ層は最大径約3cm程度の小礫を混在した砂質黒褐色土で、B10グリッドにのみ見られたものである。層厚は最大約25cmで遺物包含層である。

第Ⅲ層は砂質褐色土で、砂が優勢である。層厚は15~25cmで、B11グリッド以西にのみ見られる。 遺物は包含されるが、その量は少ない。

第四層は最大径約3cmの小碟を混在した砂質の褐色土で、層厚は約30cmである。この層中には遺物は全く含まず、この層の下位には1m以上も砂礫層が続くため、この層をもって地山とした。なお、B8グリッド以東にはこの層が見られず、第Ⅳ層下は小礫を多く含む無色土である。しかし、この黒色土には遺物を全く含まず、下位には、第四層下に続く砂礫層と同じ砂礫層が続くため、これをもって地山とし、使宜上第四層とした。

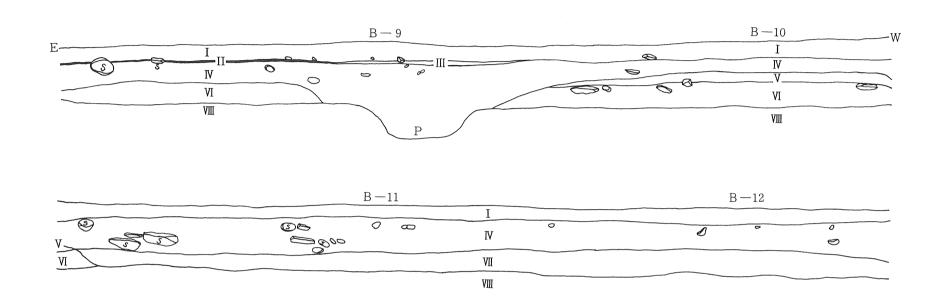
2. 遺 構

今回の調査では、3基の土塩遺構が検出された。3基とも径1~1.5 m、深さ20~55cm程度の小規模な土塩である。

土址1 (第48図1)

C9グリッド西側畔付近の第V層上面を精査中に検出したもので、第2個層下58cmまで掘り込まれている。平面形は、長軸1.68m、短軸1.30mの不整円で、長軸方向はN28℃である。断面は鍋底形







- I.耕作土
- II. 沈 澱 層
- Ⅲ. 砂質黒色土
- Ⅳ. 含レキ灰黒色土
- V. 砂質褐色土

- WI. 含レキ砂質黒褐色土
- WI. 砂質褐色土
- Ⅷ. 含レキ砂質褐色土(Ⅷ'含レキ黒色土)
- S.石
- P. ピット



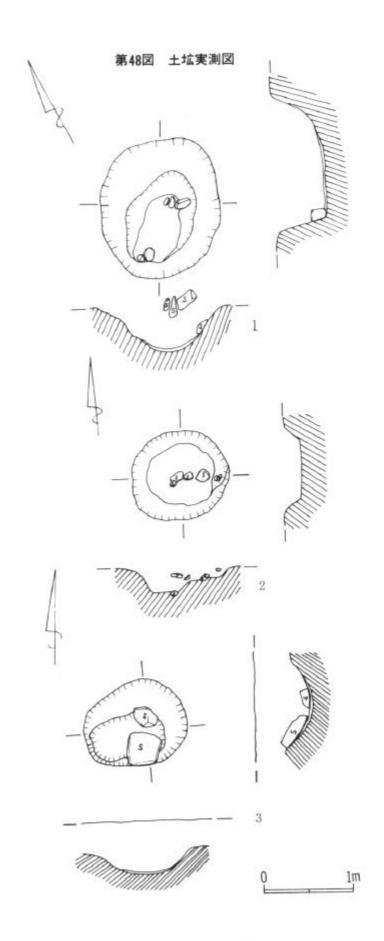
である。埋土は第IV層の含礫 灰黒色土が大部分であるが、 第IV層よりやや粘性が強い。 ピット底面には砂質黒色土が わずかに堆積している。埋土 中には小礫がたくさん混在す るが、ピット上面には12~25 cmの石が3個並んだ状態で存 在した。埋土中に土器片、石 器片、石錘が混在した外は、 特に目立った遺物は発見でき なかった。

土址2 (第48図2)

C10グリッド北側畔付近の 第 V 層上面を精査中に検出し たもので、第 V 層下 20cmまで 掘り込まれている。平面形は、 長軸1.18m、短軸0.99mのほ は円形で、長軸方向はN86 W である。断面は浅い逆台形で ある。埋土はすべて第 V 層の 含礫灰黒色土で、ややしまり が悪く小礫が少ない。また埋 土中には、13~25cm程度の石 が 5 個混在していた。埋土中 に土器片、石器片がわずかに 混在する外は、特に目立った 遺物は発見できなかった。

土 址 3 (第48図3)

B9グリッド南側畔付近の 第V層上面を精査中に検出し たもので、第VⅢ層下30cmまで 掘り込まれている。平面形は、



長軸1.15m, 短軸0.95mの不整円で、長軸方向はN84°Eである。埋土は第№層の含礫灰黒色土が大部分を占めるが、ピット底面には灰褐色の粘土が薄く堆積していた。また底面には、25×35×13cm、25×30×15cmの石が2個存在した。埋土中には、石器片を数点発見した外は遺物は見られなかったが、ピット検出面より約5cm上部から、三脚石器を発見した。

3. 出土遺物

土 器

塚の下遺跡出土の完形及び復元土器は、その器形により、浅鉢形土器、鉢形土器、深鉢形土器、 壺形土器、注口土器、甕形土器に分類でき、その割合は浅鉢形土器が最も多く、次で深鉢形土器、 壺形土器、注口土器、甕形土器の順になる。

これらの土器と土器破片を、その施文方法により、次の様に分類した。

第1類土器(第49図1~4)

網様撚糸文の施文された土器である。2は複合口縁である。

第2類土器(第49図5)

網様撚糸文が沈線文化したもので、斜格子目文が施文されている。

第3類土器 (第49図6,7)

地文に、主に縦方向の細かいカキ目が見られ、斜位の平行沈線文、曲線文が施されている。同一 個体である。

第 4 類土器 (第49図 8 ~ 10, 第50図11~ 14, 第62図 137 ~ 138 · 図版27, 28)

斜縄文のみの土器である。12、14は複合口縁である。137 は深鉢で胴がやや張り、口縁はわずかに外反する。縄文はやや細目で、概して右下がりに施文されているが、不規則である。器体の4分の1程度はへら状工具によって縄文が磨消されている。138 は壺であるが、ややゆるんだ縄により施文されている。同施文具により、頸部は横位、体部は左下がりに施文されている。

第5類土器 (第50図15~24, 第51図32, 第63図139, 140)

縄文と沈線文の組み合わせで、沈線により円形文、方形区画文、弧線文、入組曲線文などのモチーフが描かれる。縄文は口頸部と胴部で方向の異なるもの(15・18・22・23)があり、また、縄文施文後にある範囲を磨り消したもの(18・22・23)と、画線内に縄文を充填したことが明らかなもの(27~32)とがある。

139 は縄文を、140 は撚糸文を器体上部 3 分の 2 に施文したのち、沈線により円形や曲線文などを描き、その後に一部磨消を行っている。またいずれも、頸部や口縁部には粘土紐による隆帯が設けられ、隆帯両側に沈線が施されている。140 の隆帯上には刺突文が施されている。刺突文の施文に使用された棒具と沈線を施すのに使用された棒具は異ったものである。139 は良質の粘土が使われ、焼成も良い。140 には注口が付されている。

第6類土器 (第52図33~第53図49,第64図141~第65図146)

複雑にからみ合った雲形様の入組曲線文が施文されたものである。47は施文後に全を磨り消す手法を用いている。141 はかなり大形の深鉢であるが、143、145は鉢形、142、144、146は浅鉢である。142、143、145には口縁部に2個または3個の突起があり、突起には、143には8の字状、145には、Y字状の粘土紐による隆帯が付されている。144と145には、底部にも沈線による円、あるいは二重円が描かれている。8と9には朱が塗られている。

第7類土器(第54図50~第56図72,第66図~第67図)

入組曲線文が、2~3本単位の平行沈線によって描かれるものである。直線と曲線が併用されており、一部渦巻状や流水状を呈するものがある。口縁部には突起のある隆帯や、横位平行沈線が巡るものが多い。147~154の文様構成は、147を基本形として、それぞれが類似した文様構成をとっている。152と154の器表面には朱が塗られており、152の底部は、意図的に打ち抜かれたと思われる穴があいている。147と150は壺、153は鉢形、148、149、151、152、153、154は浅鉢である。151と154は欠損部が多くて不明であるが、浅鉢は、いずれも平縁であると思う。

第8類土器 (第68図155, 156)

この類の文様は、第7類の土器の文様構成と基本的には類似するものと思われるが、2~3本の平行沈線ではなく、1本の沈線によって描かれているところが特徴である。155 は大型の甕形の土器であるが、頸部に2本の隆帯、胴部に1本の隆帯を付して、その間が文様帯となっている。頸部の隆帯の両側には、沈線が施されている。156 は注口土器である。文様構成からしてこの類に入れていいかどうか疑問であるが、沈線1本による単純な文様構成をとっているということで、一応この類に位置づけた。注口の形態に特徴が見られる。器表面はよくみがかれ、光沢が見られる。

第 9 類土器 (第56図72~75)

L字状の区画文が互いにかみ合って入組状となるものである。72はそのモチーフが横方向に展開 するらしい。

第10類土器(第56図76~78, 第69図157, 158)

8の字状の曲線文の施文された土器である。78はそれが縦位に連鎖状となっている。157 は深鉢形土器, 158 は下半分しかないが, おそらく深鉢形土器であろう。157 は 8 の字状沈線文の間に, 第7 類土器に見られるような入組曲線文や, 第8 類土器に見られるような蛇行した曲線文などが見られる。158 は第7 類土器の14の土器と類似の文様構成をとっているものと考えられる。

第11類土器(第57図79~87, 第70図159・図版35・図版45-22)

粘土紐隆線による直線文,入組文などが施文された土器で、隆線の両側には沈線が施されている。 159は大型の深鉢形土器である。

第12類土器(第57図88~第58図97)

口縁部の山形突起部に粘土紐隆線による懸垂文、隆帯状の突起が貼付されたものである。

第13類土器 (第58図98~第60図116)

長方形文の施文された土器である。98は単に平行沈線間を弧線でつないだもので、106~116 は 長方形文の間に円形文が施されたものである。

第14類土器(第60図117~118)

口頸部に重層する横位平行沈線文のある土器である。

第15類土器 (第60図119~121·図版38)

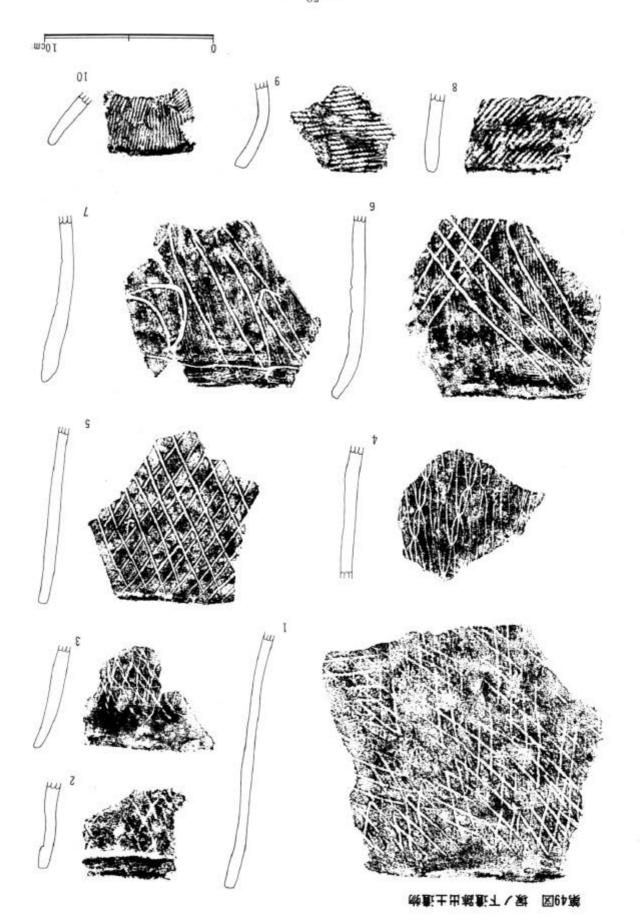
カキ目文の施文されたものである。 121 は底部付近である。

第16類土器(第60図122~第61図129,第70図160~163)

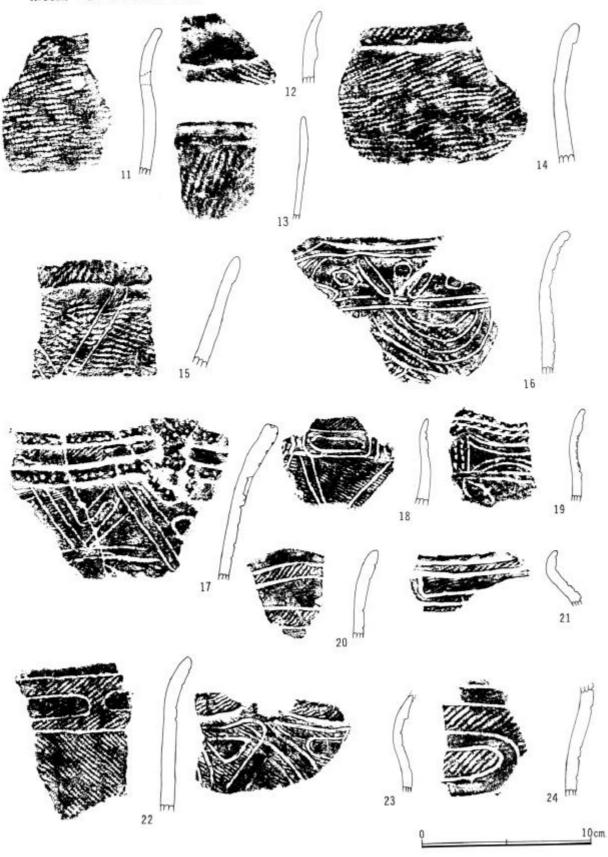
無文の土器である。129 は特に丁寧に研磨されている。160 は壺、161 は深鉢、162・163は鉢形 土器である。162と163はよく研磨されているが、160 は胎土に砂粒が多く、表面がザラザラしてい る。160と161は輪積痕が明瞭である。

第17類土器 (第61図130~136)

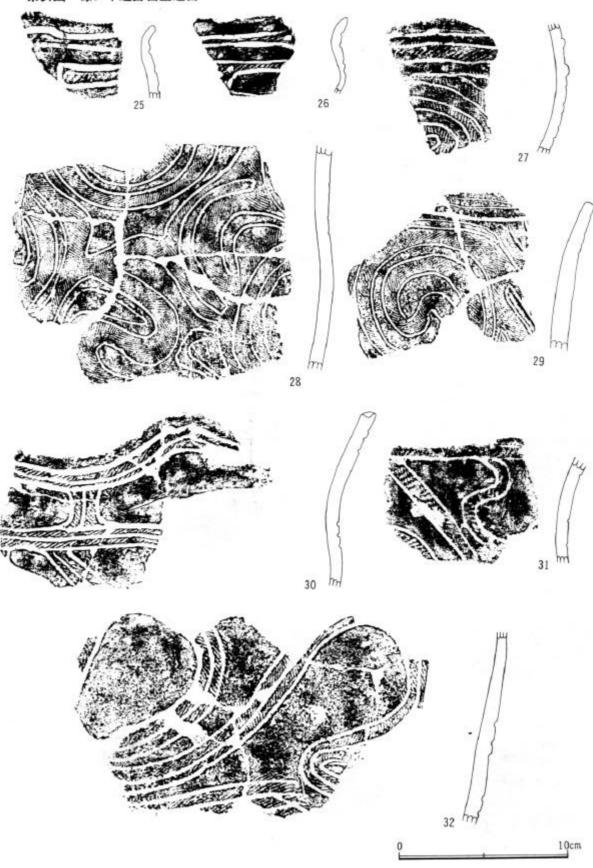
横位に平行沈線が引かれ、これらの上下を弧線が連結する。この平行沈線間には縄文が施文されているが、他は研磨されている。134は耳状の突起、136は突起の頂部がS字状に造り出されている。 以上の土器のうち、第1~3類土器は大曲Ⅰ式、第2~第16類土器は十腰内Ⅰ式、第17類土器は 十腰内Ⅱ式に比定されるものと考えられる。



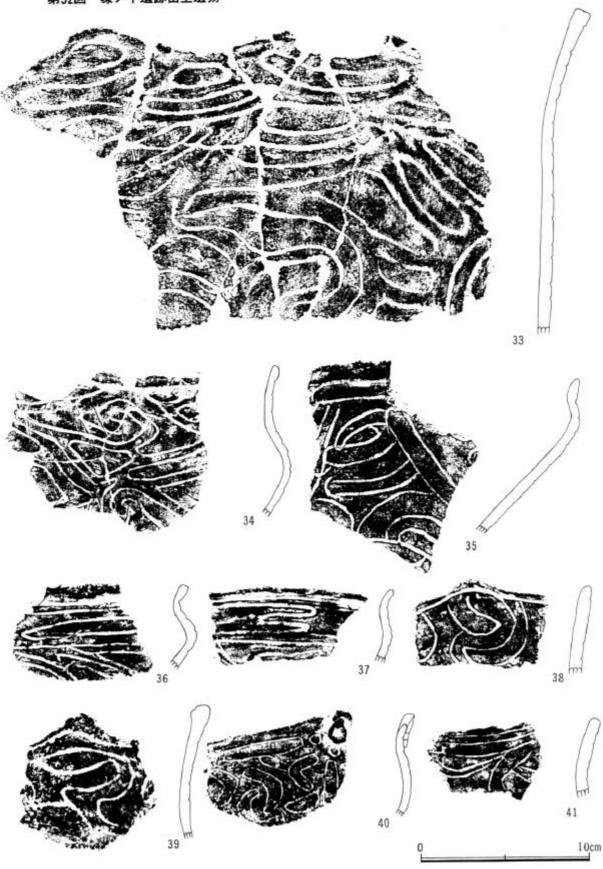
第50図 塚ノ下遺跡出土遺物



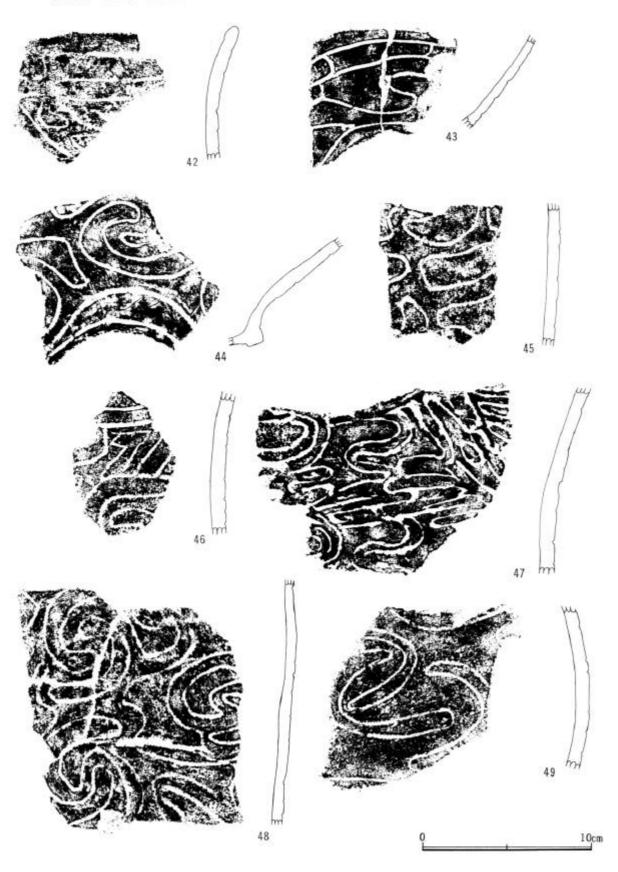
第51図 塚ノ下遺跡出土遺物



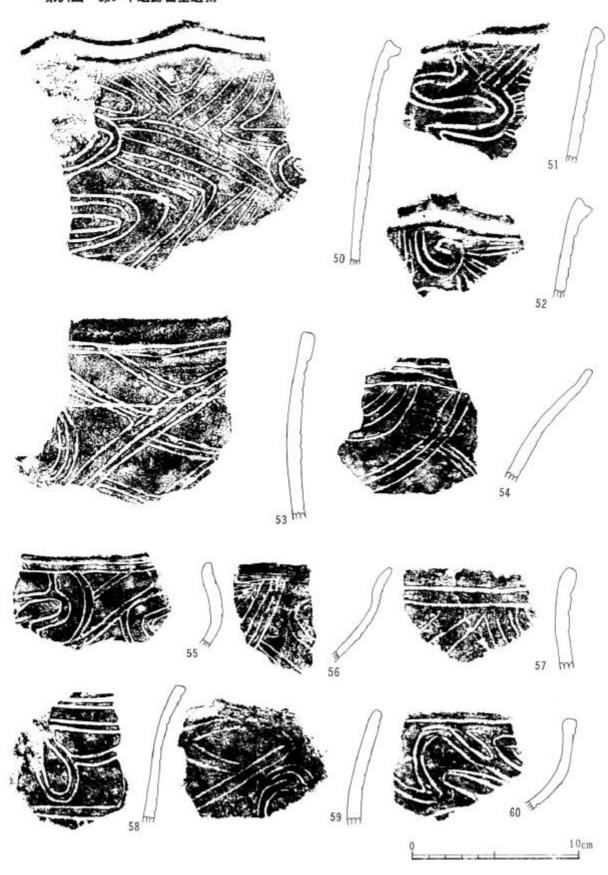
第52図 塚ノ下遺跡出土遺物

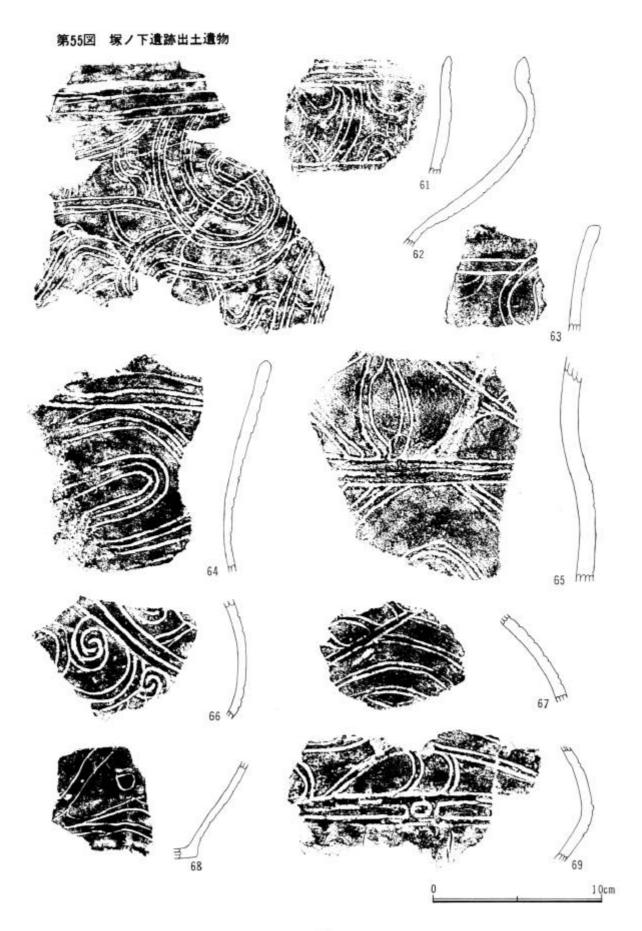


第53図 塚ノ下遺跡出土遺物



第54図 塚ノ下遺跡出土遺物



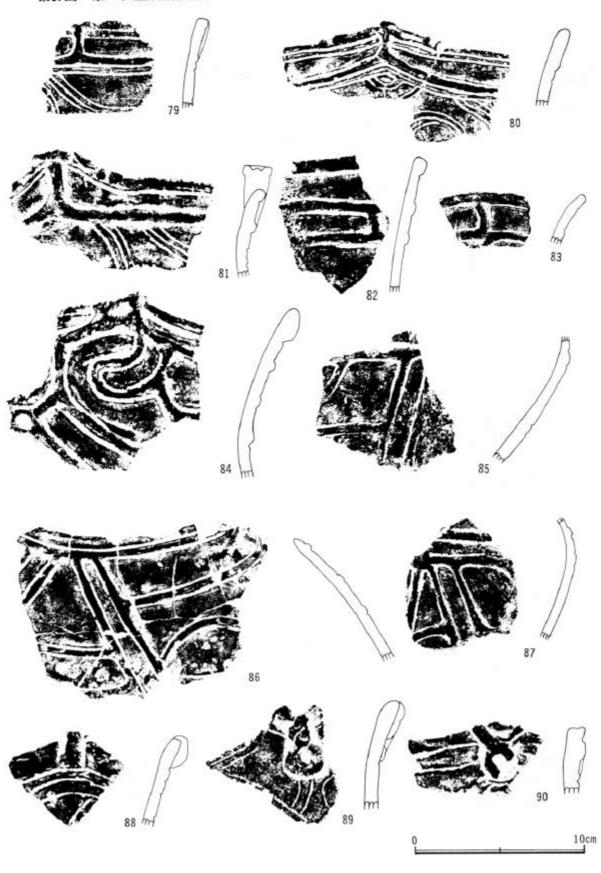


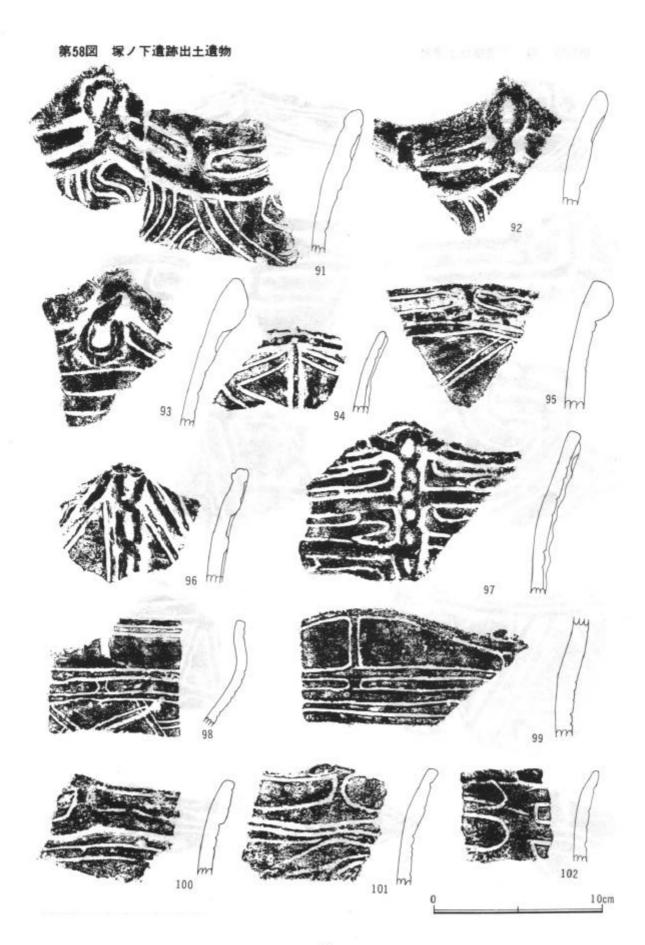
第56図

下遺跡出土遺物

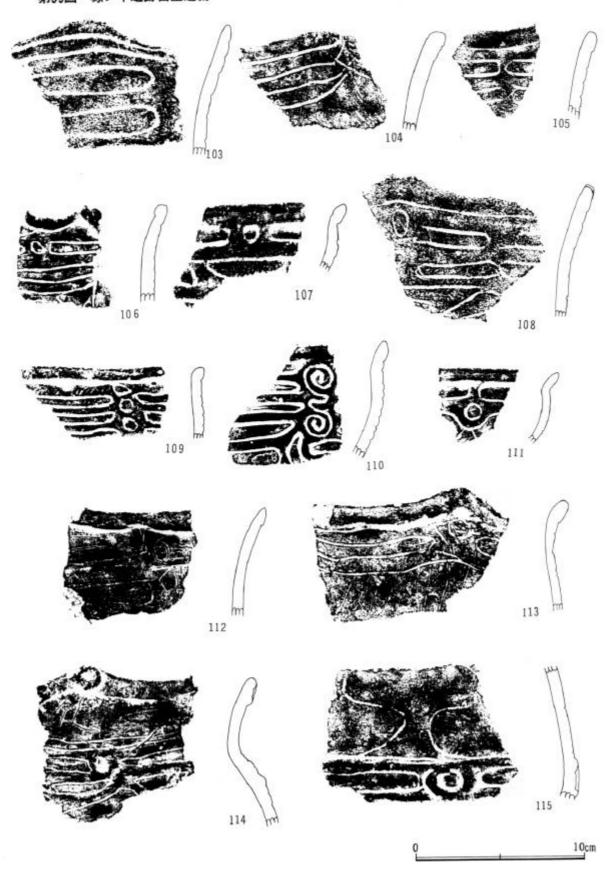
- 66 -

第57図 塚ノ下遺跡出土遺物

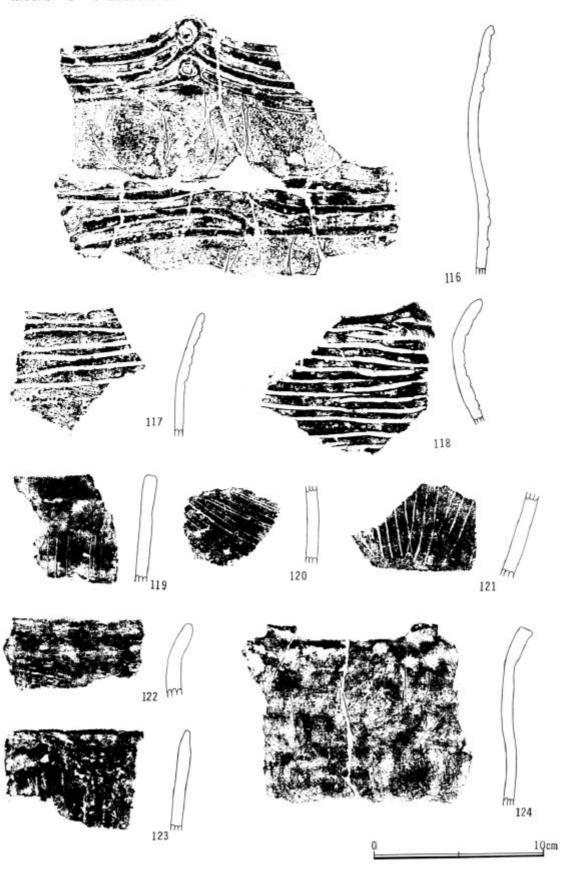




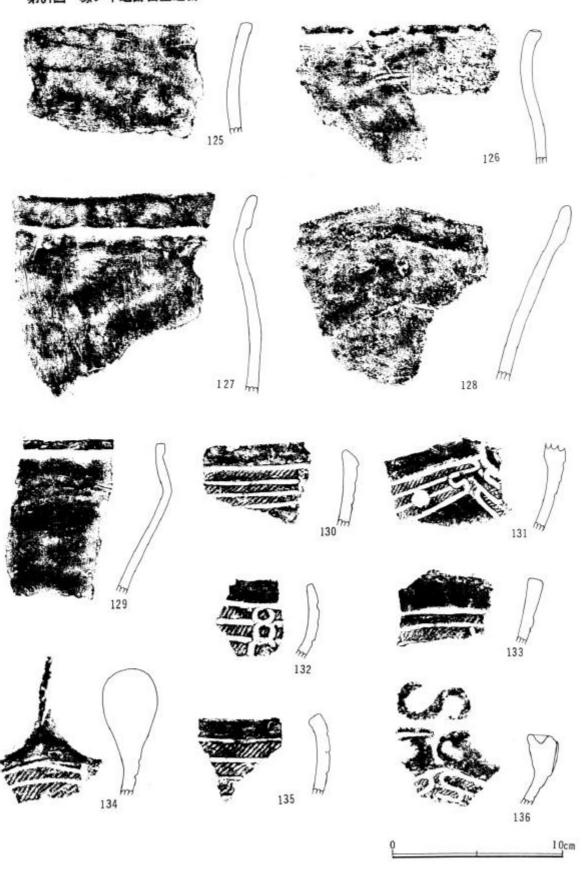
第59図 塚ノ下遺跡出土遺物



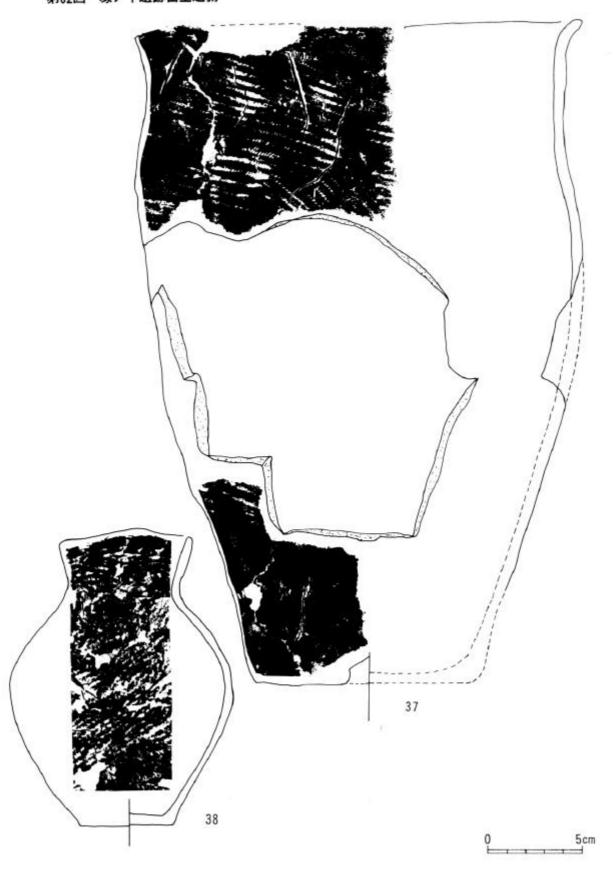
第60図 塚ノ下遺跡出土遺物

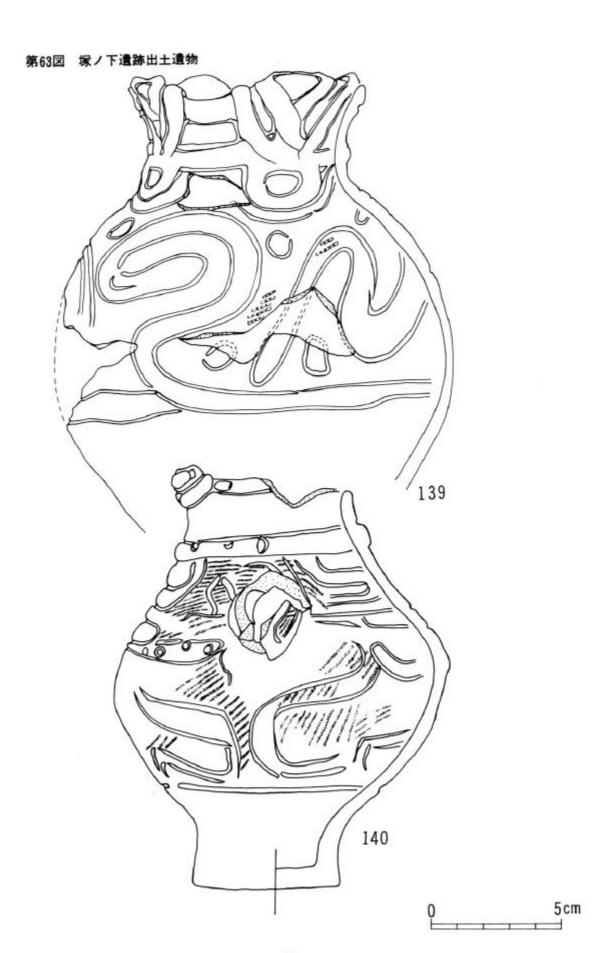


第61図 塚ノ下遺跡出土遺物

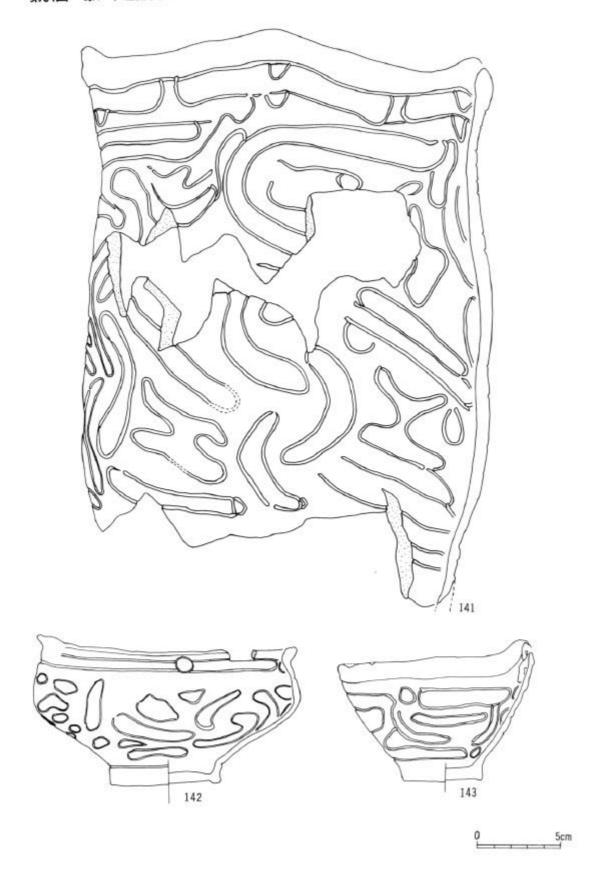


第62図 塚ノ下遺跡出土遺物

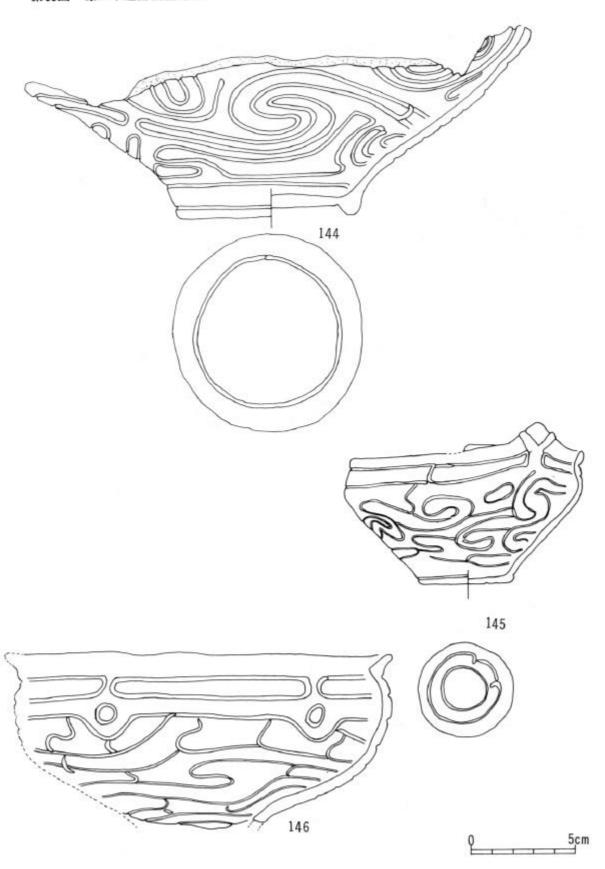




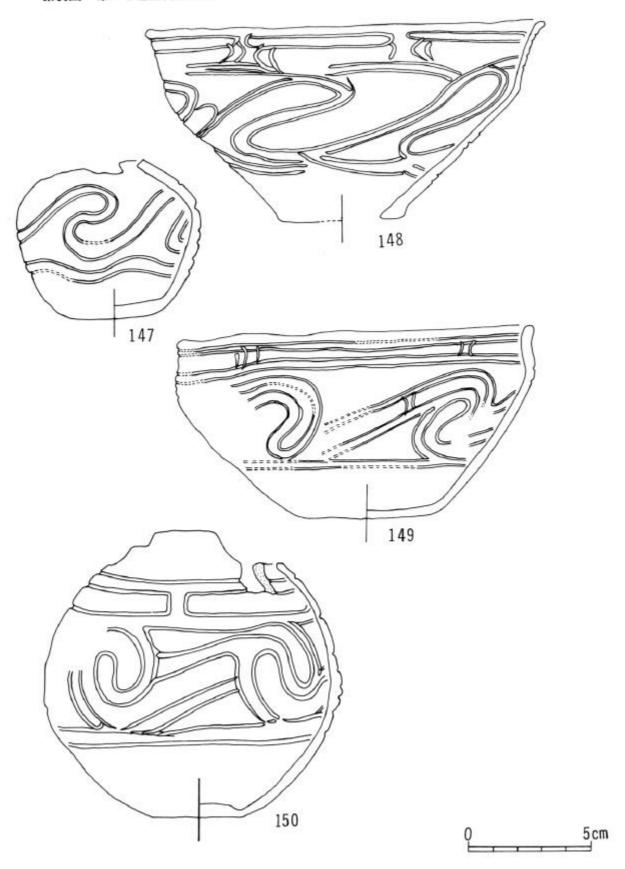
第64図 塚ノ下遺跡出土遺物



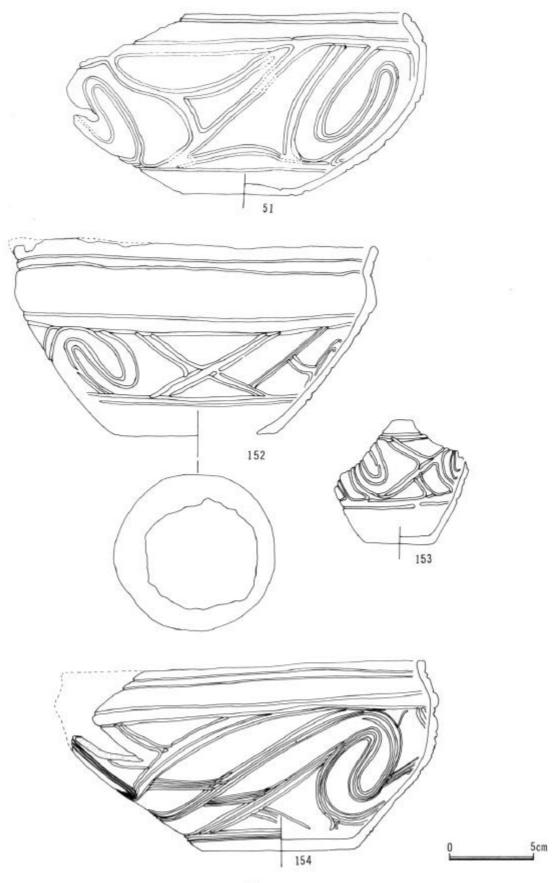
第65図 塚ノ下遺跡出土遺物

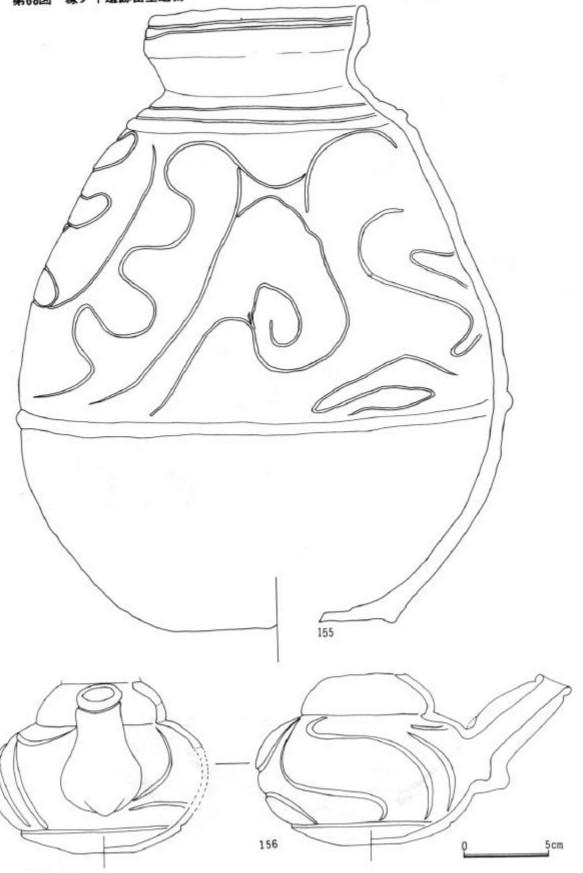


第66図 塚ノ下遺跡出土遺物

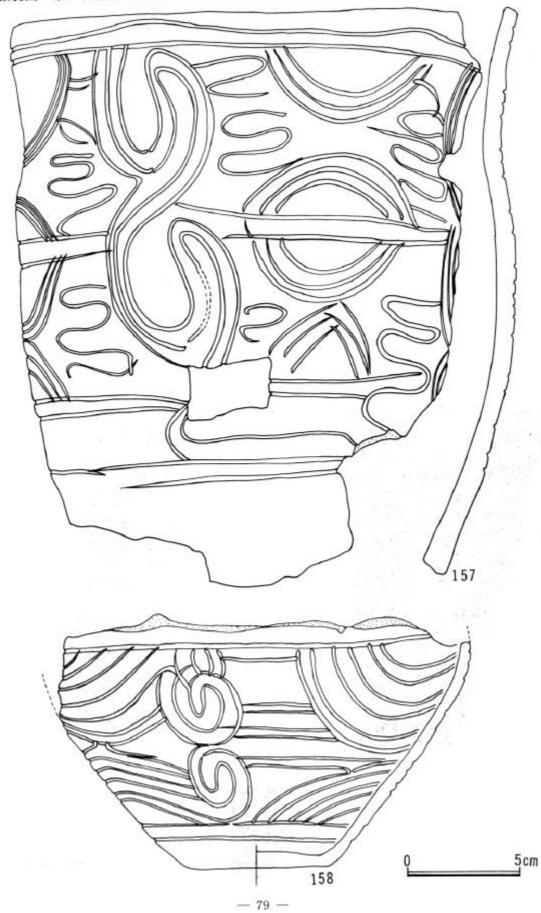


第67図 塚ノ下遺跡出土遺物

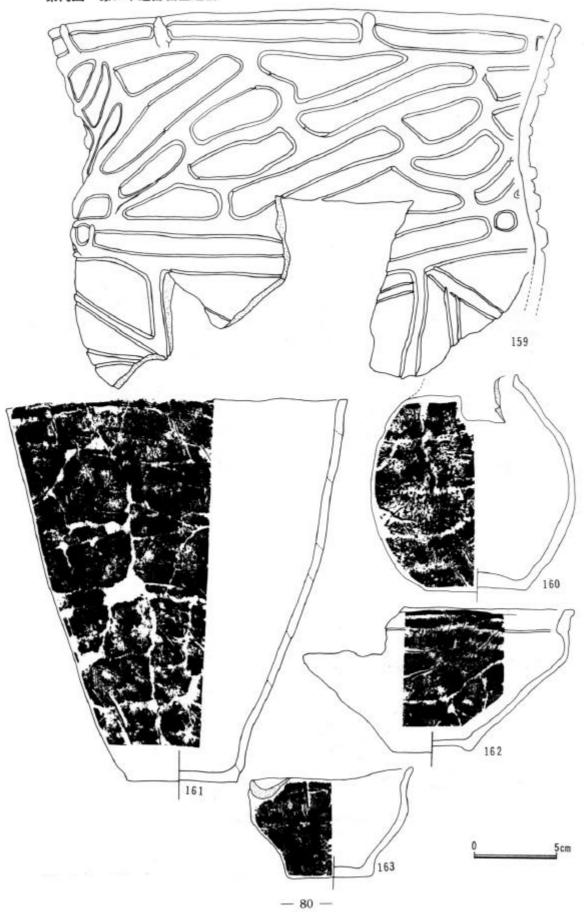




第69図 塚ノ下遺跡出土遺物



第70図 塚ノ下遺跡出土遺物



土偶・土製品

塚の下遺跡からは、土偶2個体、鐸形土製品11個、管状土製品1個、耳栓1個、スタンプ状土製品1個、有孔球形土製品1個、蓋2個が出土した。

土偶 (第71図1, 2·図版8)

土偶は、復元によりほぼ完全な形になったもの(1)と首、腕、下半身を欠損したもの(2)の2個体が出土した。1は全身が平べったく、板状になっている。文様は全くなく、部分的にへら状工具による擦痕が見られる。首は前に突き出し、顔面はやや丸形であごがとがっている。目には天然アスファルトが使用され、眉の部分が隆起している。眉間には鼻口が開けられている。両手の手のひらの部分はくぼませている。胴は全身の3分の2以上あり、胴長である。下腹部にはへそが付されている。脚部は短かく、大きく内湾していて、いわゆる0脚である。身長は24cm、肩巾は12.5cm、胴部の厚さは1.8cmである。

2 は胴部分で全体が板状である。両面及び側面に沈線と刺突文により施文されている。背面には 朱が塗られていた痕跡が認められる。胸部には乳房形作ったと思われる2 つの突起があり、その上 にその輪郭を描くように沈線で施文されている。縦12.5cm、横12cm、厚さ1.2 cmである。

鐸形土製品 (第72, 73図)

出土した鐸形土製品は合計11個であるが、これを形態的に分類すると次の3種類に大別することができる。

- 1類一頂端部につまみ部分を作り出し、そこを貫通したもので、これをさらに、側面に隆帯を設けたもの(1-a類)とそうでないもの(1-b類)に分けることができる。
 - 2 類一頂端部を真上から貫通したもの。
 - 3類一頂端部を貫通しないもの。
 - 1-a類(第72図1~3)
- 1は器表全体にやや太目の沈線と、それを施文したと同一棒具による刺突文により施文されている。また隆帯にも刺突文が施文されている。器内表面には漆が塗られていた痕跡がある。
- 2 は器表全体に細い沈線と、沈線を施文するに使用したものと同一棒具による刺突文が施文されている。また隆帯は大部分が剝離しているが、隆帯にも刺突文が施文されていた痕跡がある。器内表面には漆が塗られていた痕跡がある。
 - 3は無文で、隆帯は細く低い。
 - 1-b類(第72図4~第73図9)
- 4, 5, 6は胴部がやや張り出した形態で、4は細目の沈線で、5は太目の沈線で器表全体が施 文されているが、6は無文である。4, 5, 6いずれも器内表面には漆が塗られていた痕跡がある。 7, 8, 9はいずれも無文で、器内表面には漆が塗られていた痕跡がある。
 - 2類(第73図10)

やや胴部が張り出し、口縁部にやや太目の沈線が一条施文されている。器内表面には漆が塗られていた痕跡がある。

3類(第73図11)

やや扁平で、器表面は無文である。口縁部は折り返しになっていて、やや外反する。器内表面に は漆が塗られていた痕跡がある。

管状土製品(第73図12)

長さ4.9 cm, 径1.8 cm。径約4 mmの棒状用具で貫通されている。

耳栓 (第73図13)

直径 1.6 cm で滑車形を呈し、中心部に 1 mm くらいの穴があけられている。全面に朱が塗られている。

スタンプ状土製品 (第73図14)

スタンプ部分は直径 4.7 cmの不整円で、柄の部分は 3.5 cmでやや傾斜している。

有孔球形土製品 (第73図15)

推定であるが、原形は球形で、その中心部を貫通したもののようである。現存部はその3分の2 と考えられる。推定の大きさは最大径約9cmで貫通孔の径は約3.5cm。表面全体がやや太目の沈線 によって施文されている。

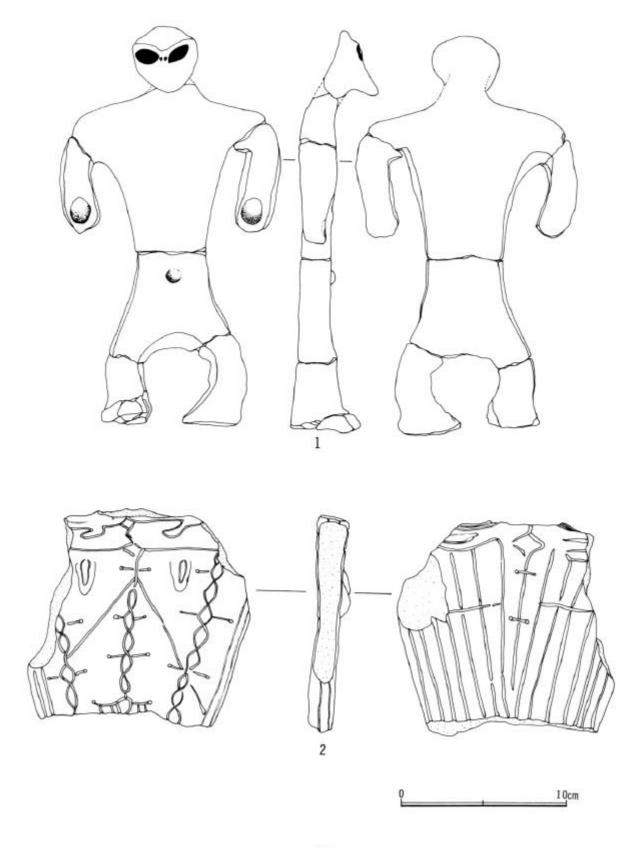
蓋 (第73図16~18)

16は直径約9.5 cmで、つまみは注口を思わせるような管状になっている。外側表面には、やや太 目の沈線が施文され、さらに、同一棒具による刺突文が施文されている。内側表面は無文で、全面 に炭化物が付着している。

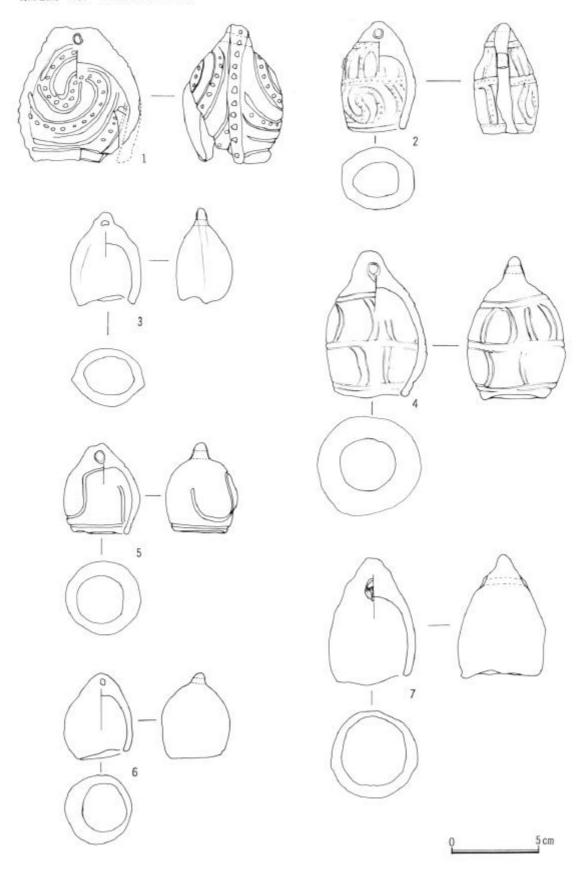
17は直径 7.2 cm, 高さ 3 cmで, 外側表面には粘土紐隆線による直線文や円形文が描かれ, その両側に沈線が施されている。

18はミニチュア土器の蓋と思われる。直径 4.4 cm, 高さ 1.2 cmで, 山形のつまみを付している。

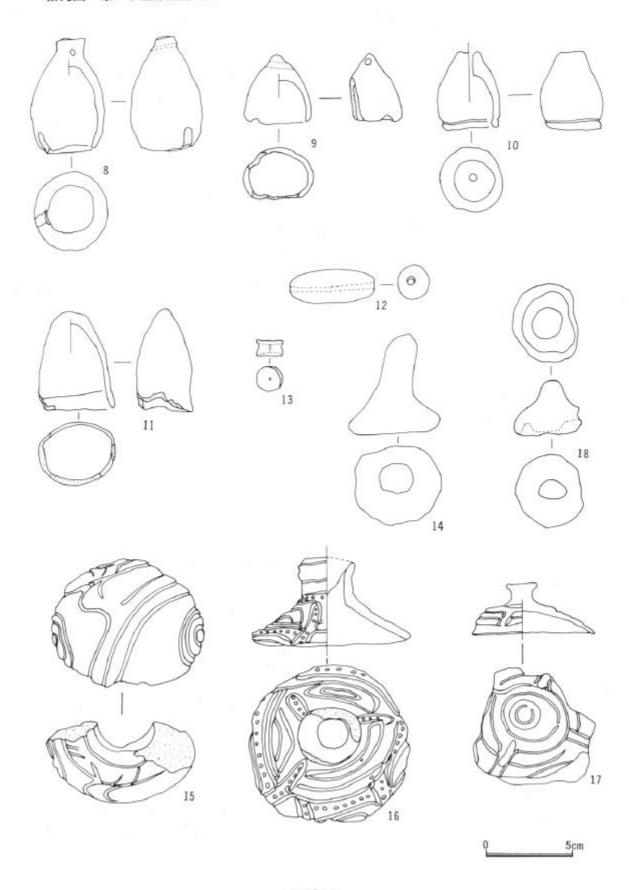
第71図 塚ノ下遺跡出土遺物



第72図 塚ノ下遺跡出土遺物



第73図 塚ノ下遺跡出土遺物



石器, 石製品

石器及び石製品も他の土器、土製品などと同じように集石のある地域から、それに混じた状態で出土した。その種類は石皿、掻器、石匙、石錐、石鏃(有茎、無茎、抉り込みのあるものなど)、三脚石器、円盤状石製品、三角形石製品などの他に特異な石製品もある。他の遺跡と違って、きわだって多いことで注目されるのは掻器と称した(総称した)もの、三脚石器、三角形土製品、三脚石器、円盤状石製品で、一般の集落遺跡ではこんなに多く出土することは少ない。この特徴が本遺跡の性格を考える上で重要であろう。他に石鏃でも図版に見られるように小形で美しいものが多いのも注目される。

搔器 (第78図1~5)

掻器の出土数は大変な数で整理箱1 ぱいある(10×30×60cm)。これらの石器を観察すると剝片への加工は主要剝離面側からの押圧(打撃)によって再加工が施されるものがほとんど、背面からの加工で主要剝離面側への再加工は無いにひとしい。その加工の仕方で分類すると、剝片の打面を上にして見ると、第74図のように、

- 1. 打面を除いて三方に再加工の施されたもの
- 2. 左側と先端に再加工の施されたもの
- 3. 右側と先端に再加工の施されたもの
- の三種に大別できる。平面で先端を見ると
 - a. 刃部が直線的になるもの
 - b. 刃部が弧円状をなすもの
 - c. 刃部が槍先のように尖るもの
 - d. cと同じように尖るか、どちらかにかたよって尖るもの

の四種に大別できる。

第74図2は1a, 3は3d, 5は1cと分類が可能であろう。他は図版に示した。石質はほとんどが頁岩で、中に玉髄がある。

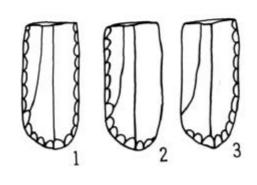
石匙 (第75図 6, 7)

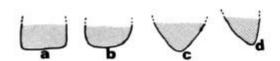
石匙は縦形6と横形7の二種あり、縦形の ものが多い。7のつまみにアスファルトが付 着している。

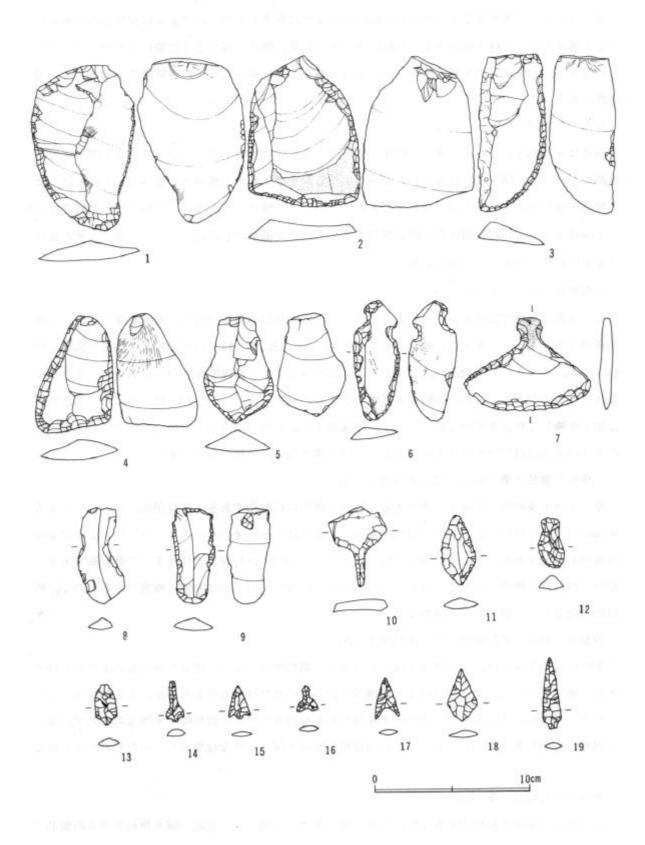
石錐 (第75図10)

剝片を利用して錐部を長くつくり出したもので、一般にある石錐である。14も石錐のように見えるが基部の具合を見るとちょっと異

第74図 掘器模式図







なる。

石鏃 (第75図11, 13, 15, 17~19)

11, 18のように菱形をなすもの、13, 15, 19のように有茎のもの、17のように抉り込みのあるものなど種々ある。石材は頁岩が多いが他にメノオ、石英、鉄けい石のように美しい石材で作られたものも多い。有茎のものが最も多い。14, 16は石鏃のように見えるが、形が特殊で実用品でない可能性がある。

石皿 (第76図)

石皿は8点出土している。すべて破損していて、全体像は推定するしかない。1は上端が直線で、 胴部がふくらみ、図下端になるにしたがって尖がる形をなすものと推測される。2、3、4は1ほ ど胴部が張り出さず、二等辺三角形をなすものであろう。縁はしっかりとっており、その高さは0.8 ~1 cmほどある。石材は凝灰岩、砂岩製である。2 の中央部が少し凹んでいるが、他ではその痕跡 (使用された)があんまり認められない。

三脚石器 (第77図1~25)

この石器は全部で25点出土している。大きいものは1辺11cm前後のもの、8 cm前後のもの、5 cm 前後のものとあって、大きさに差がある。1~4、10、13、15~17、21~25のように辺が弧状に凹むものと、6~8、11、12、14、18などのように凹みが少なく直線的なものとがあるが、基本的な形は凹むものである。これには断面も弧状をなすものが多い。1、10、13、16、17、24、25は内面に加工を施して断面を弧状にしているが、先端部すなわち脚部には加工のないのが特徴である。22 のように表面に自然面を残すものもある。石材は黄灰色の泥岩製のものが多い。

三角形石製品 (第77図26, 27, 第78図1~13)

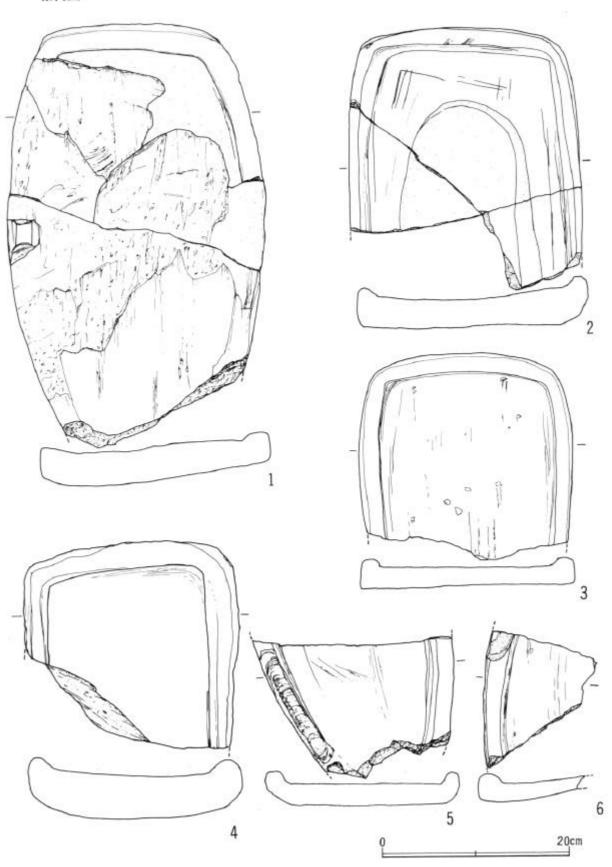
厚さ $1 \, \mathrm{cm}$ 前後の扁平な礫を、角をまるくした三角形の石製品である。第77図26、27のように $1 \, \mathrm{U}$ 8 cm 前後で正三角形に近いもの、第78図 $5 \sim 7$ のように $5 \, \mathrm{cm}$ 前後のもの、 8 、 9 、 13 のように $4 \, \mathrm{cm}$ 前後のものとがある。 3 、 4 、 10 は不整の三角形で、 13 だけが打製品で他はすべて磨製品である。 13 は三脚石器の仲間に入れるべきものであるかもしれない。 11 、 12 は表面に線刻のあるもので、 断面は湾曲をなし、 他のものとは異なる。

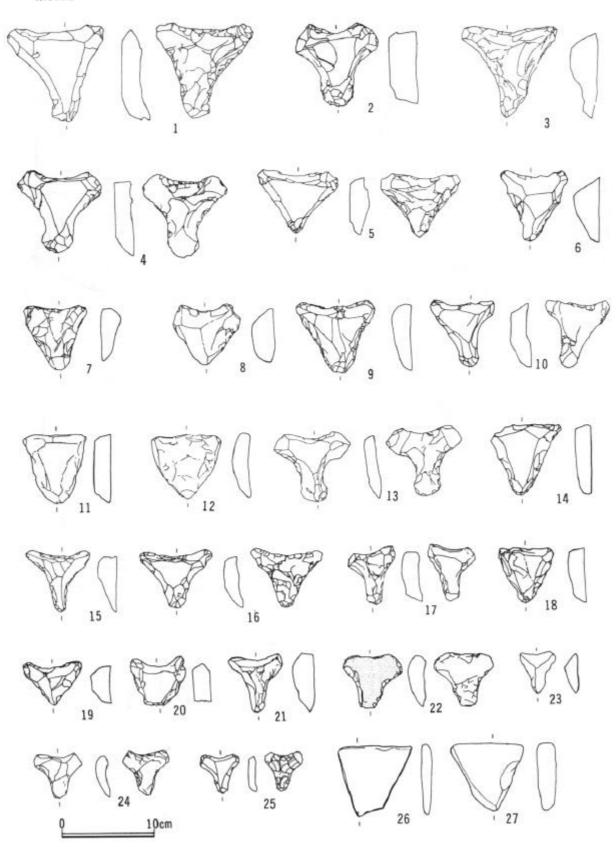
円盤状石製品 (第78図15~25, 第79図1~26)

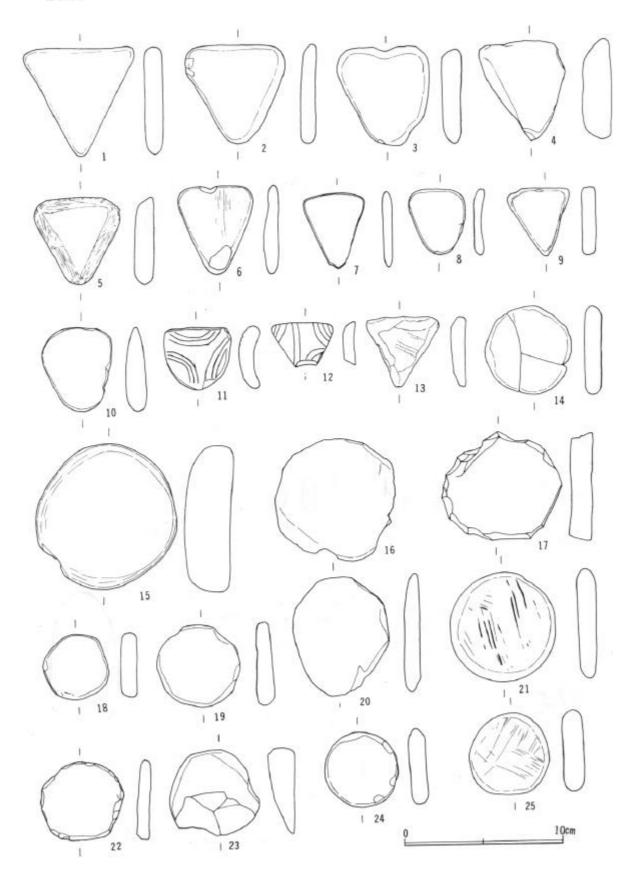
第78図15のように径10cmで厚さ3cmのものから、第79図26のように径2.5cmのものまで大小種々ある。第78図17、22、第79図21のように周辺を打ち欠いただけのものもあるが、もしかするとこれらも摩って円形にするもので、途中の未成品である可能性もある。自然礫で未加工のもので、扁平で円形のものも多く出土しており、この円盤状石製品と同じような役割をもたせたものかもしれない。

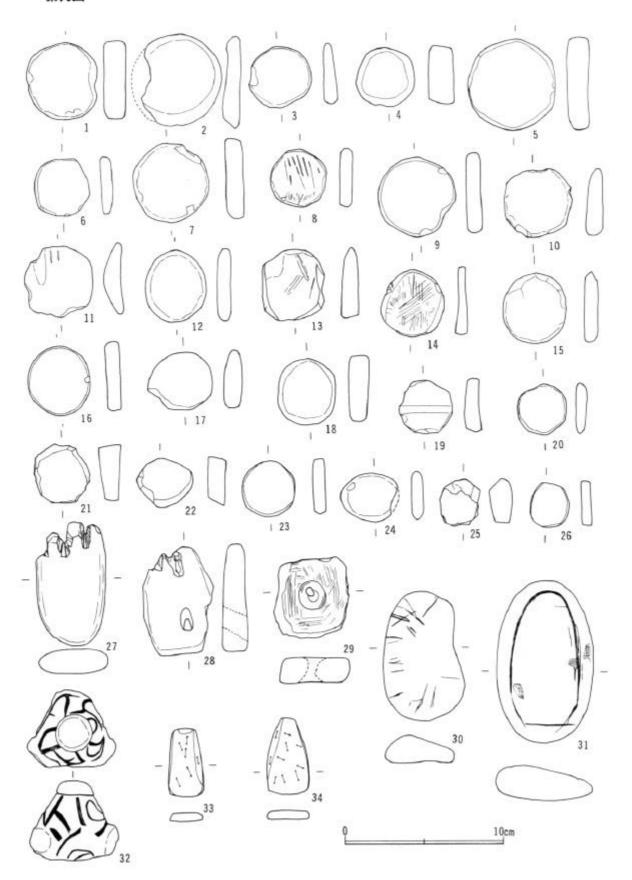
その他の石製品 (第79図27~34)

27、28は、扁平で長楕円形をなし、その一端にキザミを施し、一見足の指を想起させる石製品で









ある。28は貫孔がある。29は有孔の方形に近い盤状の石製品である。孔は上・下両方からあけている。30、31は礫に線刻のあるものである。32は三角錐のような形をなし、その尖端部にコブ状の突出部をつくり出している。体部には線刻で文様が施されている。青色の砂岩製のものである。

石斧 (第79図33, 34)

石斧が十数点出土している。33、34に図示したものは小形のもので実用品か否かはっきりしない。 図版5~1に示したように他は破損しているものが多い。

石鍾(第80図・図版5~2

石錘は60点以上出土している。他の遺跡から出土している石錘と大差なく、大きいもので11cm、小さいもので5cm前後のも、その中間のものと三種程に分けることができる。一つ特徴的なのは、一般の石錘は楕円形の長軸の両端を打ち欠いて石錘としているのに、ここの石錘はそれとは逆に、第80図に示したように短軸の両端を打ち欠いて石錘としていることで、出土品を見た限りでは長軸方向を打ち欠いたものは1点もない。これはこの地域の特徴か、時期的な特徴か、あるいは遺跡のもつ性格からこのようなものになったのか今後検討を要すると

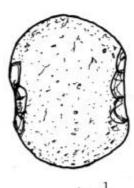
ころである。他に 1 点だけ円形の丸い礫に十字に溝をつけた垂 がある。

凹石(図版6)

凹石も30点近く出土している。凹みが一つのものと二つのも のがあるが、二つあるものが圧倒的に多い。

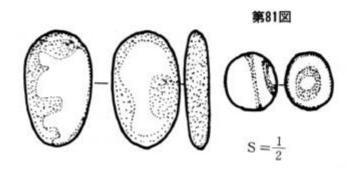
図版6~2の二段目下段のような類のものもある。泥岩製の ものに一つの凹みを作ったものですべて小形のものである。下 段左側から2番目のものは抉り込まれて異質のものである可能 性もある。

第80図



 $S = \frac{1}{2}$

他に石製の投弾と考えられるまるい石が沢山出土している。ほとんどが自然礫でまるいものが多いが、中に加工したものも認められる。石棒も一点出土している。第81図のように礫にベニガラを塗ったものもある。他に土器片利用した円盤状土製品も出土している(図版7)。



Ⅳ. む す び

昭和52年,53年の2ヶ年にわたって発掘調査した結果の概要は前項に記したとおりである。その 中で特徴的なことがいくつか確認されたので、そのことを二・三述べて結びとしたい。

第1次調査で発見された遺構、特に竪穴住居跡は10軒ある。そのうち1号住居跡を除いた他はすべてあらい仕上げの土師をもつ古代の住居跡と考えられる。したがって9軒の竪穴住居跡は3号と4号、6号と7号、9号と10号が重複して、それぞれ新旧はあるが、大略同一時期と見てよいであろう。

これらの住居跡の時期を決定する資料が二つ発見されている。一つはそれぞれの住居跡から発見されている土師器であり、他の一つは $\Pi-2$ で藤本氏によって指摘され、明らかにされた大茂内降下火山層の存在である。

土師器は前項Ⅱ—4でも記したが、あらい仕上げの土師器で、器種は甕形がほとんどで、いわゆる古代の遺跡に一般的に発見される器種である杯・皿などが皆無であること、さらに発見された甕形土器の底が砂底であることである。これらの住居跡は大茂内降下火山灰層より新しいという事実である。藤本氏の分析の結果によると、この大茂内降下火山灰層は花輪盆地に降下している、いわゆる大湯浮石層、米代川流域にシラス洪水でもたらされたシラス層と同一の性質のものであることが判明した。これは大湯浮石層、大茂内降下火山灰層、シラス層と同一であると考えることも可能なわけである。

最近の花輪盆地の発掘調査から大湯浮石層の降下年代は、約1,100年前後であろうと推測されるに至っている(富樫、1978)。この結果から考えると、本遺跡発見の9軒の住居跡はそれ以降、すなわち12C以降という結論に達するのである。住居跡にちゃんとしたカマドがないこと、新しい形の住居跡(6号住居跡)が出現し、杯・皿などがないこと、6号住居跡発見の鉄器などから考えると12C以降のものと結論づけて間違いないものと考えられる。杯・皿等とくに皿の類は男鹿市脇本埋没家屋遺跡から木器で発見されており、杯や皿はこの時期になると木器にとって替られたと見ることができる。

中世に近い時期の集落跡が発見されたのはまれであり、貴重な資料となろう。

第2次調査で発見された縄文時代後期前半の集石と大量の土器、石器、それに土偶、土製品、石製品の種類と量の多いのには驚く他ない。集石の範囲等は道路幅だけの調査なので不明であるが、今後の調査によっては楽しみな遺跡である。特に三角形石製品、三脚石器、線刻のある三角形石製品、円盤状石製品・土製品などが一緒に発見されたことは、すでに成田英子氏が指摘(成田、1974)したように、これらは総合的に扱う必要が出てきたことを証明するものであり、これらの遺物の性格が不明な点の多いことから注目される事実であろう。



遺跡の遠景

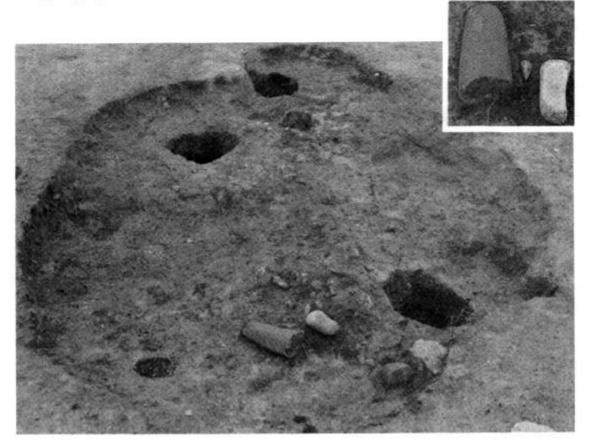


第1次調査状況

図版2



1. 第1号住居跡



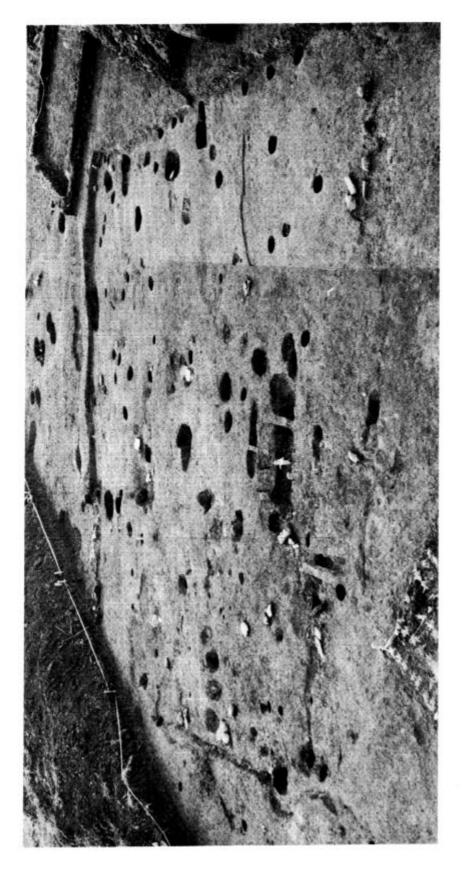
2. 第3号住居跡



1. 第2号住居跡(前), 第4号住居跡(奥)

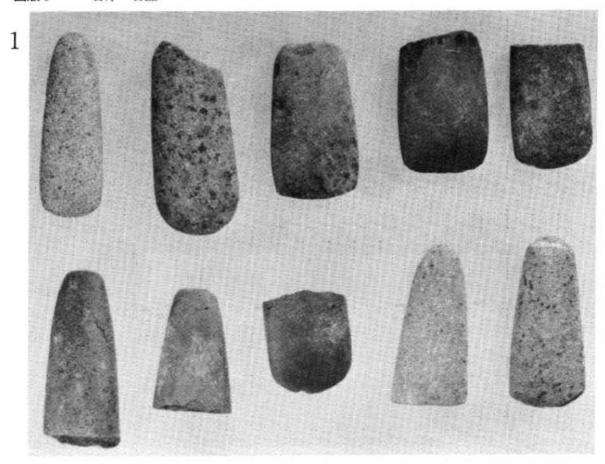


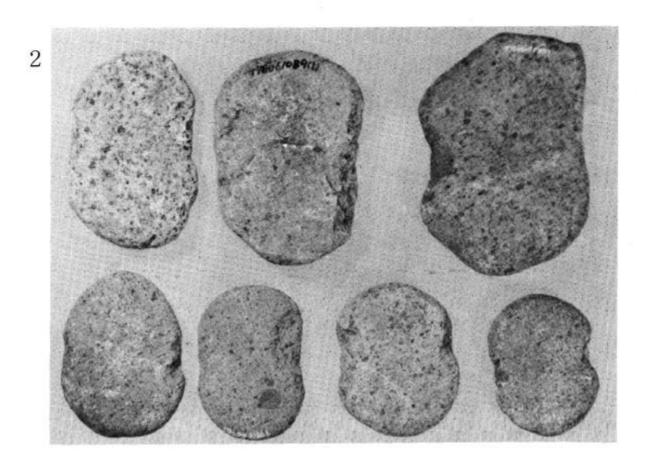
2. 第8号住居跡



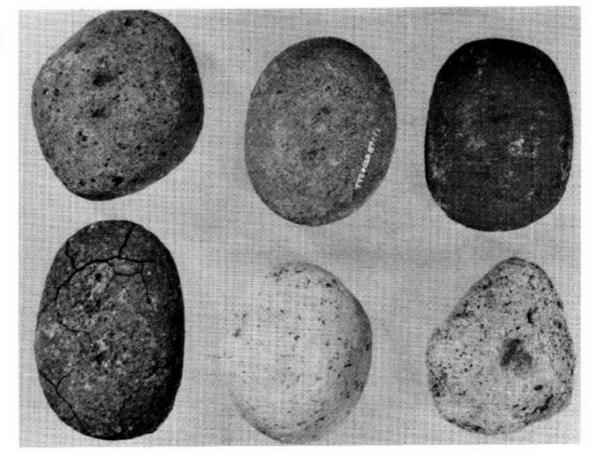
第6号住居跡

図版5 石斧・石錘

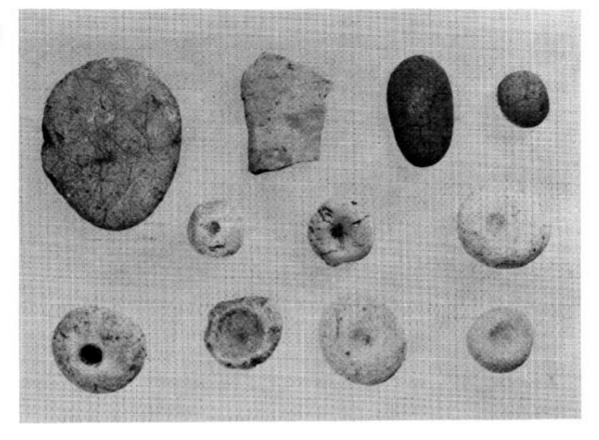




1

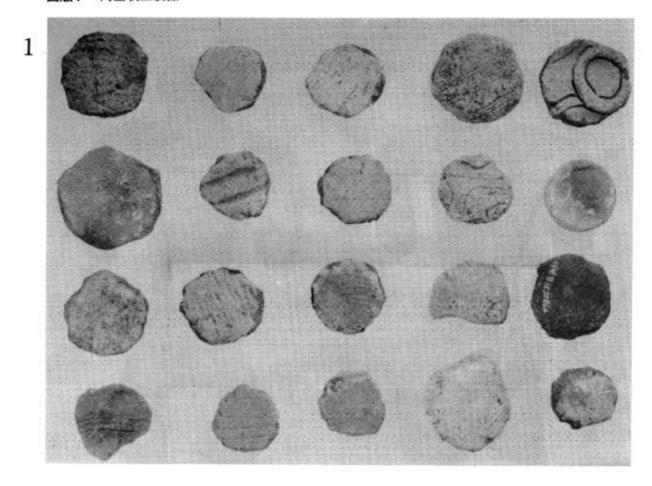


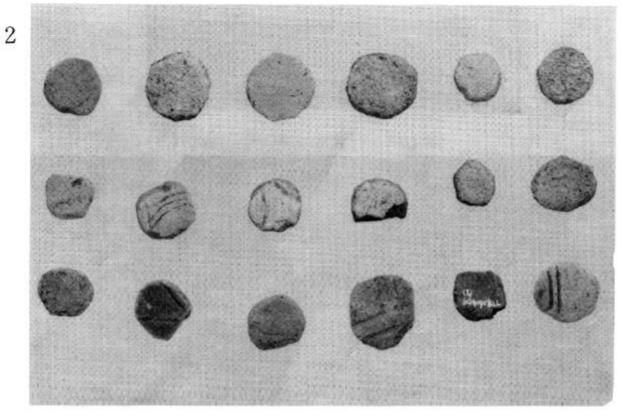
2



* 1

図版7 円盤状土製品





図版8 土 偶

